

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



CONTENTS

2010 年度非文字資料研究センター 第1回公開研究会 報告

関東大震災を描く—絵巻・漫画・子どもの絵— 2

2010 年度非文字資料研究センター 第1回公開展示および公開ワークショップ 公開展示

『関東大震災を描く—絵巻・漫画・子どもの絵—』

公開ワークショップ

関東大震災の布絵づくり 3

2010 年度非文字資料研究センター 第2回公開研究会 報告

中国・朝鮮における租界研究のいま 12

研究報告

海外神社研究会

「台湾に渡った日本の神々」 金子 展也 20

中国・韓国の旧日本租界研究会

「日露戦争前後の朝鮮半島における灯台建設と日本」 .. 谷川 竜一 .. 22

研究エッセイ

三つのミュージアム—“ムラ”の後退と只見町インターネット・エコミュージアムの意義— 佐野 賢治 .. 24

“目と足を通して” 理解した日本の文化 韓 東洙 28

瀬戸内海歴史民俗調査と中島ミカン 森 武麿 30

コラム

招聘レポート

若手研究員招聘事業の訪問研究—訪日の成果 菊池 渡 33

海外提携機関紹介

東アジア文明研究センター（フランス） ショルロッセ・フォン・ヴァーシュ 34

■本センターへの来訪者 ■福田アジオ教授 最終講義のご案内 35

■主な研究活動 ■表紙紹介 36

関東大震災を描く —絵巻・漫画・子どもの絵—

日 時：2010 年 10 月 30 日（土）10:30～16:30
会 場：神奈川大学 横浜キャンパス 23 号館 203 教室

開 会 挨拶：橘川 俊忠（非文字資料研究センター副センター長）
報 告：高野 宏康（非文字資料研究センター研究協力者）
北原 糸子（非文字資料研究センター研究員）

パネリスト：井出 孫六（作家）
片倉 義夫（漫画資料室 MORI 主宰）
新井 勝紘（専修大学教授）
及部 克人（武蔵野美術大学名誉教授）

司 会：北原 糸子



はじめに

神奈川大学非文字資料研究センター災害班では、発足以来 3 ヵ年にわたり、関東大震災の資料を調査してまいりました。その成果の披露を兼ねて、今回、展示と公開研究会、それに続くワークショップを開催いたしました。

ご存知のように、1923 年 9 月 1 日に起きた関東大震災では死者 10 万 5 千人という犠牲を出しましたが、このことを永久に記憶しておこうと当時の東京市長らは犠牲者の慰霊と震災の教訓を後世に残すためのシンボルとなる建物を発案し、民間から寄付を募り、「震災記念堂」（1930 年竣工、現在の東京都慰霊堂）と震災記念物を展示するための「復興記念館」（1931 年竣工）が建設されました。そして、ここに復興事業を推進した東京市、東京府、内務省社会局などの復興に関する資料や市民から集めた震災記念物を展示しました。しかしながら、震災から今にいたる間には、戦前「復興記念館」は一時病院として使われ、戦後は GHQ によって接収されるなど、必ずしも造られた時の志が市民の間に発信し続けられたわけではありませんでした。

非文字資料研究センター災害班では、21 世紀 COE

公開展示

『関東大震災を描く—絵巻・漫画・子どもの絵—』

期 間：2010 年 10 月 22 日（金）～ 11 月 1 日（月）
会 場：神奈川大学 横浜キャンパス 常民参考室
（3 号館 1 階）

公開ワークショップ

関東大震災の布絵づくり

日 時：2010 年 10 月 31 日（日）10:30～17:00
会 場：神奈川大学 横浜キャンパス 常民参考室
（3 号館 1 階）



1. 公開展示「関東大震災を描く—絵巻・漫画・子どもの絵—」の企画

慰霊堂収蔵庫の資料調査で、萱原黄丘作「東都大震災過眼録」を見出したことはわたしたち調査班に新しい課題を突きつけました。つまり、作者はどういう人物か、震災が描かれたもののなかでこの絵巻はどういう位置を占めるものなのか、作成当時の評価はどういうものであったのかということです。調査の結果、その家族の萱原家とコンタクトが取れ、この絵の作者はすでに亡くなられたが、夫人は存命であること（展示実施の約半年前、2010 年 5 月 6 日にご逝去）、萱原家にこの絵巻と同一テーマの別の 3 巻の絵巻が所蔵されていることなどがわかりました。早速、その絵巻を拝見する機会をいただきました。一巻 15m もある絵巻 3 巻に亘って描かれた、震災発生から被服廠での四十九日法要までの震災ストーリーは大変衝撃的なものでした。わたしは調査の過程で、震災の写真や版画、有名な池田遥邨「災禍の跡」の屏風絵などさまざまなものを見てまいりましたが、約 4 万人が焼死したという本所被服廠周辺を対象に、そこで起きたさまざまな震災の人間ドラマを庶民群像として描いたものははじめてでした。これは是非とも展示をして、

神奈川大学の学生たちをはじめ、それに一般の方々にも披露する価値があるものと考え、神奈川大学の大学祭企画の一環に加わることにしました。この絵巻は 2003 年に新大久保にある高麗博物館で展示されたことがあるということでしたが、展示図録などは発行されていませんでした。そのため、今回の展示の目的のひとつとして、この絵巻を紹介する図録を発行することも大きな課題でありました。いろいろな方々の協力を得て、その課題は十分に果たすことができました。

さて再び展示場に話を戻すと、慰霊堂に残る震災で被災した子どもたちの絵も、白洞の絵巻に劣らず衝撃的な体験を率直に語るものとして展示することにしました。さらに当初から企画の大きな柱として考えていたのは、震災体験を経て自分は生まれ変わった、つまり、自分の画家としての生まれ年は震災の年といって憚らなかった画家にして漫画家の柳瀬正夢（1900～1945）の作品も展示に加えることでした。この人物についてはすでに柳瀬の絵画を所蔵する武蔵野美術大学で展覧会が開催されていましたので、ここでは柳瀬やその同時代の竹久夢二など当時の漫画家について 30 年来関係資料を収集されて来られた片倉義夫氏のコレクションの力をお借りすることにし、また、柳瀬の評伝を執筆した作家の井出孫

六氏にご講演いただくことで柳瀬の位置づけをしていた
 だくことにしました。

以上で、描かれた震災画、すなわち、日本画家の絵巻、
 子どもの震災体験画、当時の新聞・雑誌などに掲載され
 た時事漫画の3本の柱が整いました。

また、震災写真の展示として、深代敦子氏のご好意で
 叔父に当たられる田村瑞穂氏（内務省、東京市の衛生課
 に勤務した人物）旧蔵の写真帖をご提供いただき、その
 なかからあまり一般には出回っていない震災写真15点
 を印刷してパネル展示とさせていただきます。

本展示のメインはなんといっても、萱原白洞の3巻



写真1 展示場ケース内の新聞、雑誌に見入る観覧者



写真2 麻生豊「ノンキナトウサン」、新聞連載漫画の切り抜きなど(片倉義夫氏蔵)が展示されているケース



写真3 好評だった「東都大震災過眼録」の複写本3巻

の絵巻でしたが、長さ6メートルの展示ケースでは絵
 巻の半分も広げられない状態でしたので、実際の絵巻を
 写真に撮って印刷し、それらを張り合わせて絵巻状にし
 た複製を会場に置き、自由に見ていただくことにしまし
 た。

*アンケートにお答えいただいて

展示期間の10月22日から11月1日まで（24日は
 日曜日のため休館）のうち入館者は377人、アンケート
 に記入していただいた方々は77人でした。回答者を年齢
 別にみると、10代7人、20代17人、30代9人、40
 代6人、50代7人、70代9人、居住地では、地元の横
 浜が32人とほぼ半数を占め、東京8人、それ以外のとこ
 ろからは27人の方々にお越しいただきました。なかでも
 感動したのは、茨城県からは是非見たいといって84歳のお
 年寄りが娘さんに付き添われてお越しいただいたことでし
 た。全般に比較的高年齢の方々に来ていただいたことは、
 自分自身の体験ではなくても関東大震災のことを親から聞
 いて育った年代の方々に来ていただけたと推測しています。

特に関心を持たれたものとしては、絵巻と子どもの絵に
 感動したという方がともに23人と多く、片倉義夫氏が主
 宰する漫画資料室MORIの所蔵する震災時の時事漫画や
 当時の新聞を熱心に読んでいる方々も多く、こうした消え
 てしまいがちな資料をよく収集されたものと感心された方
 も少なくありませんでした。また、会場に設置した築地本
 願寺の無声の震災映画（中央区教育委員会が編集された震
 災ビデオ、24分間）は、何回も繰り返し見ている方々も
 多く、震災の様子に限らず、当時の風俗も珍しいものであ
 ったようで、動くリアルな映像には関心が高いことがわか
 りました。

概ね、展示は好評を博したと感じています。ただ、説明
 が不足しているという声はアンケートのなかに2、3見ら
 れ、この点は反省すべきことと思いました。（この項、北原）

2. 公開研究会「関東大震災を描くー絵巻・ 漫画・子どもの絵ー」

公開研究会は10月30日、丁度台風が近づくという
 情報もあり学園祭は中止とされるなか、公開研究会はす
 でに学外の方々に周知されていると判断、決行すること
 になりました。この悪条件にもかかわらず、関係者を含
 め55人という参会者のなか開催されました。第1部は
 非文字資料研究センターの研究担当者による報告2件、
 午後は、井出孫六、片倉義夫、新井勝紘、及部克人の四

氏による講演が行われました。しかしながら、電車も間
 引き運転が始まるという状況であったため、講演後に予
 定したディスカッションは打ち切りとなりました。こう
 した状況にもかかわらず、別棟の展示場では熱心な観覧
 者も多く見られました。

【第I部】

報告① 高野 宏康 (非文字資料研究センター研究協力者)



「震災絵巻『発見』の経緯と 東京都慰霊堂収蔵庫の資料」

当日は、折からの台風により開催が危ぶまれたが、タ
 イムテーブルを若干変更して開始することになった。ま
 ず、今回の公開展示と公開研究会を開催するきっかけと
 なった、東京都慰霊堂の資料調査と震災絵巻「発見」の
 経緯について、調査担当者の一人である高野が報告を行
 った。関東大震災の慰霊施設である東京都慰霊堂には、
 約数千点の資料が保管されている。これらは、もともと
 各種の震災関連展示会の出品物や、一般市民から寄贈さ
 れたもので、いわば自然に集まった資料という性格をも
 っており、戦時期に同館が接収され病院となった際に慰
 霊堂に移されたものである。

2006年度の神奈川大学21世紀COEプログラムで
 の写真資料調査、2008年度からの非文字資料研究セン
 ターおよび、朝日新聞文化財団の文化財保護助成事業を
 受けての関東大震災資料調査会による調査まで、学術調
 査は行われていなかった。2008年度の調査時に震災絵
 巻が「発見」されたが、当初は作者が不明であった。そ
 の後、萱原白洞（慰霊堂の絵巻執筆時の雅号は黄丘）の
 作であることが判明、他にも絵巻・画帖が存在すること
 がわかり、今回の展示開催につながるようになった。こ
 れまでの調査成果としては、資料リストの作成、絵画
 20点と図表類60点のデジタル化、震災特集雑誌43
 点と復興記念館の文献資料67点のマイクロフィルム化
 を行ったこと等である。現在、公開に向けて準備中であ
 り、今後、これらの資料を関東大震災の総合的な研究に
 活用していく必要があることを指摘した。

報告② 北原 糸子 (非文字資料研究センター研究員)



「萱原白洞の『東都大震災過眼 録』について」

今回の主要な展示物の一つである震災絵巻「東都大震
 災過眼録」の作者、萱原白洞（1896～1951）は、当

時27歳、画家の山内多門のもとで修業中に、東京の淀
 橋町（現在の新宿）で震災に遭遇した。震災後まもなく、
 白洞は千葉県の土気にこもって震災絵巻を描き続け、
 1923年12月に3巻を完成させた。その内容は、震災
 の発生から四十九日法要までの約1ヶ月半を描いたも
 のである。

第一巻では、震災発生から約4万人が死亡した被服
 廠跡で火災旋風に見舞われた人びとが逃げ惑う様子を描
 き、第二巻では、冒頭に焼き崩れた永代橋を渡りかけた
 が落下し、溺死・焼死する場面、続いて戒厳令がしかれ
 軍隊が出動した、治安維持と救助活動を描いている。第
 三巻では、震災直後の混乱が収束に向かい、避難者が家
 族を捜し回る場面や、うどん屋の屋台、露天学級の様子
 が描かれ、最後は被服廠での四十九日法要で絵巻が終了
 している。その後も白洞は繰り返し同様の主題で絵巻を
 描いており、現在までに絵巻5巻と画帖2冊が確認さ
 れている。

この絵巻を通じて特徴的なことは、白洞が震災に遭遇
 した庶民に焦点を当てて、その動きを追うことに徹して
 いる点である。描かれた場面は、本所の被服廠跡周辺に
 視点をあてられ、震災の写真や絵画でよく見られるよう
 な著名な建物などは永代橋を除いてほとんど登場しない。
 時期は、震災発生から約1ヶ月半の出来事に集中して
 いる。また、重要なのは、朝鮮人への集団暴行もしくは
 虐殺の場面が描かれていることである。これらの場면을
 繰り返し少しずつ異なる表現で描いており、白洞が震災
 に強く執着していたことがうかがえる。

白洞が震災に遭遇したのは寄宿先であった山内多門邸
 であると推定されるが、淀橋町は火災を免れたため、他
 町村や町内からの避難民であふれていた。多門の弟子た
 ちも避難者の大群の救援活動にあたっていたと推定され、
 その体験が震災絵巻となって表現されたと思われる。震
 災絵巻全3巻は、師である多門のもとに50年間以上保
 管され、1982年の多門50回忌の際に遺族に返却され
 て、現在に至っている。

【第II部】

講演① 井出 孫六 (作家)



「槿の画家 柳瀬正夢」

第II部では、今回の公開展示に関連する4つの講演
 が行われた。まず、震災後、漫画を描くことが中心とな

った画家の柳瀬正夢について、評伝『ねじ釘の如く―画家・柳瀬正夢の軌跡―』（1996）の執筆者である、作家の井出孫六氏が講演を行った。震災前の1923年7月、柳瀬はマヴォ第1回展のメ切直前、「潜む暴力」の裏面に「五月の朝と朝飯前の私」を描きあげた。柳瀬の最後の油絵で、のちに代表作とされるようになった同作品は、ビルの窓から赤い火が見え、大地がぐるぐる廻り、ビルがぐらぐら揺れているような不安な構図で、井出氏は、奇しくも震災後の新宿の街を暗示しているようにと指摘された。

マヴォ第1回展が終了して1ヶ月もたたない9月1日、震災が起こった。柳瀬は、大山郁夫邸にいたが、翌日、憲兵隊がふみこんできて大山は検束されてしまう。柳瀬もまた、3日には兵士に踏み込まれて街頭に引き出され、留置場に入れられた。途中、「殺しちまえ」と罵口で叩かれ、棒で足を払われるなど、「潜む暴力」が余震から姿を現したかのようであった。その後、柳瀬は父の住む門司港に避難し、10月の初め、まだ戒厳令が解除されない東京に、救援物資を担いで戻った。焼け跡を見て廻り描き続けたスケッチブックには、柳瀬の新たな出発の意思が示されていた。

柳瀬は、正力松太郎が読売新聞を買収したことを契機として、同社を退社し、おもに本の装幀で糊口をしのぐ道を選び、『種蒔く人』の仲間を中心に充足した『文芸戦線』の同人に名を連ね、プロレタリア文芸連盟美術部で活動するようになる。『無産者新聞』には1926年3月から柳瀬の漫画が掲載されるようになるなど、昭和初期には日本を代表する左翼漫画家となった。数年後、柳瀬は早くも自叙伝を綴っているが、その中で、自分は1923年9月1日、すなわち関東大震災の焦土の中で生まれたと書いており、井出氏は震災が柳瀬に与えた影響が決定的なものであったことを物語っていると述べられた。



講演② 片倉 義夫（漫画資料室 MORI 主宰）

「画家・漫画家のみた関東大震災―竹久夢二・麻生豊・宮武外骨」

今回展示された震災当時の雑誌・新聞類のほとんどは、片倉氏が主宰する漫画資料室 MORI の収蔵資料から借用したものである。片倉氏は、それらを中心に画家や漫画家がみた関東大震災について講演を行った。震災後、多くの新聞・雑誌が大震災特集を組み、各種の大震災画

記念畫帳』としてまとまっているが、これは図工の教員であった高田力蔵の指導により、アメリカからの救援物資として届けられた色鉛筆・絵の具・クレヨンを用いて描かれたものである。そのなかに松山達夫（4年生）の二部作がある。歩行中の一人が呼び止められ、警察官と鉄砲を担いだ人物が、朝鮮人であるかどうかを見極めるために、道行く人々を検問している場面が描かれている。また、山崎巖（4年生）は、多くの民衆と軍人、自警団員と思われる人物が、一人の朝鮮人らしき人物を芋畑に追い詰めている姿をリアルに描いている。場所は現千葉県市川市中山と推測されるが、当時、中山では16人の朝鮮人が虐殺された事実が確認されており、その場面を描いたものと思われる。

また、挿絵画家・河目悌二の水彩画には朝鮮人虐殺が詳細に描かれているが、これまで一度も公表されていないとして、特にこの絵をカラーで紹介された（国立歴史民俗博物館所蔵）。新井氏はこの絵画が描かれた状況の検証は必要だが、現場を目撃した河目が歴史的な出来事として刻印しておく必要があることを強く意識したのではないかと指摘された。

今回、展示されている震災絵巻の作者、萱原白洞も、朝鮮人へ暴行を加える場面を描いている。白洞は、千葉県の土気にもって絵巻を何本も描き続けた。その他にも、絵巻で関東大震災を描いたものとして、堅山南風の震災絵巻や、「関東大震災絵巻」（作者不明、歴史民俗博物館所蔵）があり、様々な情報を読み取ることができる。最後に新井氏は、これまでの文字・文献資料に偏りすぎた研究を反省し、非文字資料の分析に積極的に取り組んでいく必要があることを指摘された。



講演④ 及部 克人（武蔵野美術大学名誉教授）

「阪神・淡路大震災共同布絵づくり」

及部氏は「もうひとつの公共デザイン」の関心から自ら参加された、1995年の阪神・淡路大震災後の神戸市長田区真野地区の住民組織の活動とコミュニティの復旧・復興の取り組みの体験から生まれた「布絵づくり」について話された。「もうひとつの公共デザイン」とは、自治体、企業などの上からのデザインではなく、それらを受け取る側の市民の立場からの公共デザインを意味するものだという。被災者と東京の美大生や京都・大阪のボランティアの共同作業によって、震災体験を布絵で表

現するというものであったが、その成果物である布絵を会場で掲げつつ、企画の意図について解説された。今回の公開展示では、真野地区で作られた作品を2点展示しているほか、関東大震災を描いたさまざまな展示品をみて感じたことを、実際に布絵で表現するワークショップを開催することに大きな意味があるとされた。体験してはじめて納得する企画であるため、当時の布絵作成過程について映像記録を上映しつつ説明された。

真野地区は、1965年以来公害反対運動から40年以上の歩みを持ち、震災当時は、いちはやくバケツリレーで火事に立ち向かい、43戸ほどの消失で延焼を食い止めるなど、震災復興を支える住民の積極的な活動を行ったことで全国にその名を知られている。震災後の1995年4月、真野の復興にたずさわる現地の人びとからの誘いを受け、布絵づくりが行われることになったという。布絵を作ることが目的なのではなく、そのプロセスを通じて、人々が語り合い、気持ちを通じ合うことに意味がある。また布に触発されて、個性や年齢が異なる複数の人びとと一緒に絵を作ることに布絵づくりの意義があることを強調された。

今回は、関東大震災について描かれたさまざまな展示品から感じたことを布絵で表現することで、震災の被害や復興、描いた人の意図をより理解することができるのではないかと指摘し、ワークショップへの参加を呼びかけて、講演を終えた。

及部氏の講演のあと、台風接近のため、残念ながらディスカッションは中止となりました。このことは心残りではありましたが、今回の公開研究会で、絵巻、絵画、漫画、挿絵といったさまざまなかたちで描かれた関東大震災像について講師それぞれの見方が明らかにされ、また、東京都慰霊堂の調査および、萱原白洞の震災絵巻について紹介する機会が得られたことは意義深いことでし



写真 4 公開研究会の様子

た。(この項、高野)

3. 阪神大震災の布絵の展示と、関東大震災布絵づくりワークショップ

3-1 阪神大震災の布絵の展示

さて、この展示では、さらにもうひとつ重要なことを企てました。それは、阪神大震災を体験した人々による布絵を展示したことです。この布絵は展示場に飾りはしましたが、この布絵を見るということに主眼があるのではなく、これを参考に震災絵画展を見た方々にそこで感じたものを布絵に表現してもらうための参考作品として展示しました。そのため、公開研究会を開催した翌日の10月31日に一日かけて布絵づくりのワークショップを持ちました。このワークショップの成果はこのニューズレターの表紙を飾る2つの布絵となりました。

このことについて多少説明をいたします。わたしたちは美術の専門家ではありませんので、震災画を展示するという目的は美術としての絵画をみてもらうというつもりはありませんでした。関東大震災とはどういうものであったのかを絵をみて考え、こうした過酷な体験をした横浜という都市に住む者として、震災体験を想像してもらうための材料を提供しようというものでした。それも学園祭の一環として企画した意図は、若い学生諸君に関東大震災についてじっくり考えてもらうための機会を作ろうということでした。また、単に考えてもらうだけでなく、展示場で感じたものを布絵という形で表現してもらい、一種の擬似体験を通して過酷な体験をした人々が何を頼りにそれを乗り越えようとしたのかを想像する機会をともに持とうというものでした。

これは実際に作られた布絵の経過を説明することでしか説明できません。以下はこの布絵づくりに参加された人たちの体験談から経過がある程度わかるようにピックアップしたものです。



写真5 「阪神・淡路大震災共同布絵づくり」で作成された布絵

3-2 関東大震災布絵づくりワークショップ

10月30日のシンポジウムは台風の影響で昼休みを短縮し1時間繰り上げ、さらに最後の講演者の及部克人氏のお話は20分で済ませていただき、翌31日のワークショップへ引き継ぐことで了解いただきました。

31日には台風は過ぎ去り天候も青空がすこし顔を出した程度でしたが、学園祭は1日だけの開催となったものの多くの人たちが訪れ、大変な賑わいとなりました。その余波であまり学生たちが関心を示さない「関東大震災」ですが、77人の入場者がありました。そのなかからワークショップへの参加者も得られ、12人が集まりました。及部克人先生の指導で、この12人が仲間となって布絵づくりに挑戦。このようなワークショップでは、素材の準備やプログラムの進行を支える助言者を“ファシリテーター”と呼ぶのだそうです。今回のワークショップでは、経験豊富な讀井さん、加藤さん、佐藤さんの3人がこの役割を担ってくださいました。ほかの人たちははじめて集まったメンバーなので、お互いをよく知らないもの同士でしたが、この仕事は参加者たちがお互いに多少気の許す関係を作らないと、そうそう簡単に共同の作業はできません。及部先生の指示されるままに動作をしていくと、自然と知らない間同士でのこの場での関係が出来上がるように感じられました。

ウォーミング・アップ

- 1) まず、みんなで輪になる。隣の人と手を繋ぐ。次に隣同士が足、肩、頭などどこか一箇所に触れる。それを異なる場所で2、3回やってみる。触る場所が限られるから、苦しい格好、面白い格好になる。笑いが起きる。
- 2) 6人1組になって輪を作る。目をつぶって手を前に差し出す。触れ合う手を握り、絡み合う手を放さずに繋いだまま、元の輪になるようにほぐしていく。これが難しい。結局ほぐして元に戻る場合といくら



写真6 ウォーミングアップその1



写真7 ウォーミングアップその2

やっても出来ない場合がある(二つの輪になってしまおうとだめらしい)。この辺で仲間意識やある種の達成感が出てくる。

- 3) 2人1組になる。毛糸で自分の顔を画用紙の上に描く(毛糸は切らない)。次に相手の顔を毛糸で描く。これは思うように描けないがそれらしいものができる。
- 4) この2人1組で、紙にクレヨンでお互いの似顔絵を一筆書きで描く。次に相手の顔だけを見て(画用紙は見ないで)一筆書きで似顔絵を描く。相手の顔だけを見て描くとこれはなかなか傑作が生まれるものらしい。つまり、相手の人から受けた印象が有る意味では鮮明に出てくることもある。意外にもその人物の本質が表れるのである。
- 5) さて、ここから本題の序。これまではコミュニケーションするための序の序の口だったわけだ。なにか不定形な紙を渡され、隣室の展示から得た震災の印象を描くことを指示される。不定形な紙切れは実は大きな模造紙一枚を適当にちぎったものであり、それを元一枚に戻してみると、さてさて現れるのは各人各様の震災印象の合作のできあがりというわけであった。



写真8 震災印象の合作。布絵作成に入る前に各々のイメージが膨らんだ

布絵づくり

- 6) ここからが本格的布絵づくり。準備段階で並べられたさまざまな色や風合いを持つ布地や毛糸を見ただけでその山と積まれた材料にエネルギーが詰まっていると感じた参加者もいた。そして、こんな風につぶやいていた。

「まずは準備をはじめる。色とりどりの毛糸、木綿、化繊、絹、サテン、様々な布地が袋から出てくる。机の上に並べると1つの長机には乗り切らず、長机を2台用意する。

毛糸や布地を触りながら並べているだけで、手に感じる感触と、目に入ってくる色味の心地よさから、心が和み、楽しい気持ちになる。並べられたさまざまな種類の毛糸や布地。実は素材がそこに集まっていること自体にも、エネルギーの集積があるように感じた。ワークショップに集まってくる人のエネルギーと同じぐらい、素材として用意されているものにもエネルギーがある。これだけの多種の素材を選択し、集めることはそれ自体、人のエネルギーがずいぶんとかかるものだ。布地は、まだ洋服の形そのままのものや、スカーフのままのものもあり「これは誰がきていたのか？」と思わせる。それぞれの素材に、単に素材だという以上のエネルギーがここに集まるまでにくっついてきている。それを私たちはワークショップの素材として使う。布地はテーブル状になるように、細く裂いていく。布の端にはさみで切り込みを入れ、切り口ができた左右に引っ張って、ビリビリビリとひと思いに引っ張るのだ。完全に切り離さないで、布の端まで切れたら、少し残して、次の列につなげて逆方向に同じように切る。そうすると、長い長いテーブル状のものができる。ビリビリビリビリ、楽しい。この作業がワークショップに入るまえのウォームアップになった。」

- 7) 作品は6人1組で、2点が制作された。まずはタイトル「紅蓮の炎から逃れて、日常を取り戻す人々」のグループのつぶやきから、なにを描こうとしたのかを辿ってみることにしよう。

火災旋風に巻かれた被服廠跡では当時南無妙法蓮華経や南無阿弥陀仏の声が絶えなかったというが、その声を布絵で表現しようという案も出た。参加者のなかでは無口であった一人の女性が赤い布や赤い毛糸でそれを表そうとしたが、毛糸がうまく貼りつかず、結局、黄色布地の渦で、火災が渦巻くなかを読経の声が一際こだまするようにと心を決めた模様。



写真9 火災旋風の上を流れる読経の声の表現を工夫する

紅蓮の炎を白い布地の上に大胆に斜めに置き、炎が走り抜けて行くイメージを作り、それを軸に左と右を破壊と創造のイメージで住み分ける構想である。左半分には崩壊した建物を描いていき、右半分は、絶望した人々が立ち上がり、前進しようとする姿、“希望”が描かれた。それぞれが自分で得たイメージを語り合い、以上の構図がままとると、その後はみなそれぞれの担当する場面をいかに演出するかで必死。無言の作業が続いた。

小学6年生の男児は黙々と黒い布で死んだ人、灰色で死にそうな人をあらわそうと鉄で布地を切り込む。倒れて亡くなった人は腕立て伏せの格好にする。とこだわり、そのかたち作りに苦心の様子である。かと思えば、義捐床屋の様子にしきりに感銘を受けた女性は「徹底的に具象で迫る」と宣言、震災の混乱にもかかわらず、身なりをキチンと整える人々に感心したのだという。

出来上がった布絵は、画面の下から上にかけて時間が経過している。下部は震災直後。左下は崩壊した建物、逃げ惑う人々とそれを追う炎。右下は救いを求めた人々のこだまする読経。中央は混乱した町の様子。左は橋から落ちる人。右は行方のわからな



写真10 支えあう大きな手と手を表現する

い家族を捜す人たち。鎮火した黒煙。やがて、画面右上では、救援物資が各地方から船でやって来て、人々が新しい橋を作りはじめ、子どもらが遊戯をしたりしている様子が描かれている。

次に「渦巻く炎、そして、共に支えあう希望の手」の作成班について紹介しよう。

関東大震災の絵巻を鑑賞して、それぞれがまず強い印象を受けたものが“渦巻く炎”だった。布絵のいたるところにある渦の形は、それぞれが感じた炎を表わす。震災の恐ろしさというのは、「人々の間に差別の意識や自分の身勝手さが表面化してくることではないだろうか」と考え、これからやってくるとも知れない大地震に備えて、地域でのつながりを作れたらいいねと話しながら作業が進んだ。かなりまともで現実的な議論をしたグループである。渦を巻く炎や人々の残酷さを表した布絵から、共に支えあう希望の手が左右より伸び、画面真ん中のピンクは、人を思いやり、癒しあう象徴しようということになった。人の輪をイメージした波を打つ一本の毛糸がこれらを大きく包み込み画面いっぱいに大きな円を描き、「周りの人と交流していきたい、そして、今日ここでの出会いも大切にしたいね」といいながら布絵が完成した。

- 8) 以上が布絵制作の過程であったが、このワークショップに参加した方々の感想が寄せられているので、紹介しておこう。

■人々と関わりながら体を動かしたり絵を描いたりするワークショップをいくつか行い、いよいよ本題の関東大震災の話に入っていました。4人ずつ3つのグループに分かれ関東大震災のシーンを再現しました。ストップモーションで震災時の1場面を作っていくものです。この頃には参加者間でのコミュニケーションはスムーズに行われ、誰が何の役をやるかはすぐに決まるようになっていました。火に追われ逃げ惑う中、足をつかまれて動けなくなってしまうシーン、火に追われながらもケガ人を担架で運ぶシーン、協力し合い逃げる家族のシーン。震災を資料で見るだけでなく、自分自身をその状況に置いて中から考えていくような面白いワークショップでした。参加者全員が少しずつ関東大震災への思考を巡らせ始めていたように思います。

今回のワークショップは「関東大震災について」という重い課題でありながら終始楽しい雰囲気で見渡しました。それは布絵を作り上げるという目標があったからだと思

います。関東大震災の時に起きた様々な出来事を見つめ、人々と意見を交換し合いながら一つのもを作り上げていったのはひじょうに貴重な体験になりました。(須田真実)

■美術館で来館者の鑑賞のケアも職業としている私としては、もうすこし丁寧に展示を見る声かけや、動線があったらより良かったかなと感じた。作品を見ることは意外と丁寧にしないと、実は鑑賞者はよく見ることができていないということがある。展示室にあったレプリカの絵巻が大変よくできていたので、これを手に取って、展示ケース内では見えない部分までよく見て、見ながらワークショップ参加者たちが発言し合うようなステップがあったら、もっと発見があったのではないだろうか。この鑑賞体験が、次の布絵を作っていくときに共有体験の底流に流れるものとして重要になっていくのではないか。(稲庭彩和子)

■他グループの作品をのぞいてみたところ、方向性が全く違っていて驚いた。鶴の模様の布を大胆に使ったり、人物を一人一人、布で表現したりと、大変具象的な布絵になっていた。それに対して、自分のグループでは、旋風や助け合いなどが、各自のイメージで抽象的に表現されているように思われた。どちらがうまいとかではなく、グループの個性が程良く反映されているように感じた。再度、自分の作った部分と他の部分を見直して、何を付け加えていけばよいかを考えてみた。使う布によって全然異なる旋風が表現できるので、激しい炎、どす黒い炎、だけではなく、綺麗な旋風も作ってみることにした。たまたま手元にあった花柄の布を使ってみると、旋風が花のように見え、楽しくてどんどん作っていった。取りあえず、激しさと美しさという炎の持っている両義的な性格、といったかんじで自分なりに勝手に埋届けてみることにしたが、どうやら、他の人も、真っ赤な炎の柱の横に、うすいピンクの布で大河のような流れを作っていたりと、同じような感覚で表現していたようであった。共同作業であることから、お互いになんとか影響を受けているようで興味深かった。(高野宏康)

■関東大震災の展示を通じて感じたものを、布絵により表現するというのは、難しいのではないかと始めは感じておりました。しかし、グループで震災について話しながら作業を進めていくうちに、個人個人で考えられる以上のイメージをつかむことができたと思います。共同の作業を行っていく中で、それぞれ個人が思い描いていた震

災に対する恐怖や残酷な事柄を表現するだけでなく、将来に通じる希望までも表したいと、皆の気持ちが変化していきました。(北田修)

以上は、今回の公開展示および公開研究会の報告ですが、アンケートの回答として、次のような一文をよせていただきました。この展示を見る方々に、普段は気づかなかった心の深いところにある思いを呼び起こさせるものであったことに、むしろ、企画当事者として感動させられました。そのアンケートから引用させていただき、まとめと感謝の言葉に換えたいと思います。

■数年前に他界した私の祖母は、関東大震災を経験しています。祖母は大分県生まれですが、11、12歳のころに、当時の流行り病で父母とも亡くしてしまい、その後東京の親戚の家に預けられ、そこで関東大震災に遭いました。「一面、火の海だった」と、私は関東大震災の話を小さいころに何度となく祖母から聞かされていました。当時の私には、頭では想像するものの、どこか遠いところの話のようにしか捉えられず、実は、祖母に震災の話を聞いていたということさえ、もう何十年も忘れていたのです。ところが、今回のイベントに参加させていただいて突然思い出したのです。子供のころに両親を亡くし、その後引き取られた先で震災に遭い、そして、第二次世界大戦までも経験した祖母の人生は幸せだったのだろうか、と、祖母の人生を振り返りました。展示されていた震災の子供の絵が、当時の祖母の年齢にも重なり、祖母も同じような絵を描いたのだろうかと思像しました。

布絵づくりワークショップに参加された方々は以下の通りです。

指導：及部克人（武蔵野美術大学名誉教授）
ファシリテーター：加藤寛子、佐藤愛美、讃井明弥子
参加者：稲庭彩和子、毛受雄一、須田真実、永田雅人、渡邊嘉子、北原糸子、片尾一美、高野宏康、北田修、北田晋稔、藤川美代子、佐藤愛美、小林明仁、小山悠（順不同）

なお、企画にご協力いただいた展示実施委員会、常民文化研究所、非文字資料研究センター事務局の方々に深く感謝申し上げます。（この項、北原）

2010 年度 非文字資料研究センター 第2回公開研究会

中国・朝鮮における租界研究のいま

日時：2010 年 11 月 26 日（金）10:00～18:00

会場：神奈川大学横浜キャンパス 1 号館 308 会議室

開会挨拶：福田 アジオ（非文字資料研究センター長）

報告者：大里 浩秋（非文字資料研究センター研究員）

孫 安石（非文字資料研究センター研究員）

袁 継 成（中国・中南財經政法大学 教授）

李 愛 麗（中国・中山大学 准教授）

高 錫珪（韓国・木浦大学 学長）

韓 東洙（韓国・漢陽大学 教授／非文字資料研究センター研究協力者）

富井 正憲（韓国・漢陽大学 教授／非文字資料研究センター研究協力者）

内田 青蔵（非文字資料研究センター研究員）

コメンテーター：川島 真（東京大学大学院 准教授）

貴志 俊彦（京都大学 教授／非文字資料研究センター研究協力者）

吉澤 誠一郎（東京大学大学院 准教授）

司 会：大里 浩秋／孫 安石



はじめに

今年度第2回公開研究会は、まず福田アジオ神奈川大学非文字資料研究センター長の開会あいさつがあり、ついで同センター「中国・朝鮮における旧日本租界」研究班の大里浩秋が「19世紀後半から日本が中国と朝鮮に設置した租界の歴史をふり返り、その実態や他国が設置した租界との相違を明らかにしつつ、租界研究が東アジア史研究に占める位置について考える機会としたい」との開催趣旨を述べた後、午前、午後各4人ずつの報告が行われた。以下、8人の報告を簡単に紹介する。



大里 浩秋

「租界研究の現状と展望」

大里浩秋氏による第1報告は、①台湾国史館の日本租界関連資料から読み取れること、②中国における日本

租界の歴史概観の2テーマに分けて報告された。

①では、租界関係資料が豊富に所蔵されている台湾の中央研究院近代史研究所檔案館と国史館の資料を概観した上で、1920年代後半以降の資料を置く後者の資料は、日本の外務省外交史料館にも手薄な内容を補うものであると指摘し、そこにある資料を1926—32年（中国が租界回収の動きを示した時期）、1938—40年（日中戦争が起り、各地に進駐した日本軍がそこにある他国租界にさまざまな干渉を行った時期）、1945—49年（日本敗戦後中国が各地の租界を接収した際に、租界に利権を持つ国々との間に各種の交渉を持った時期）の3段階に分けて簡単な紹介を行った。

②では、中国における日本租界の歴史をこれから書くつもりであると述べ、そのために参考になりそうな資料や先行研究を上げて、それらに基づいてその歴史を概観しようとするればどんな内容になるかをスケッチしたいとしてそれをたどるとともに、租界を設置する前に、日本の当事者は、日本に先んじて租界を設置していた西欧列

強のやり方を観察して批判的な見方をしていたが、いざ自らの租界を持つ段階になると、西欧のやり方に見習いつつ、それでもなお日本の租界設置は他国とは違うと最後まで考えていたようだと言及した。さらには、日本はこれまで知られている以上に租界を設けようとしていたとして、実現はしなかった広州租界の例を上げた。

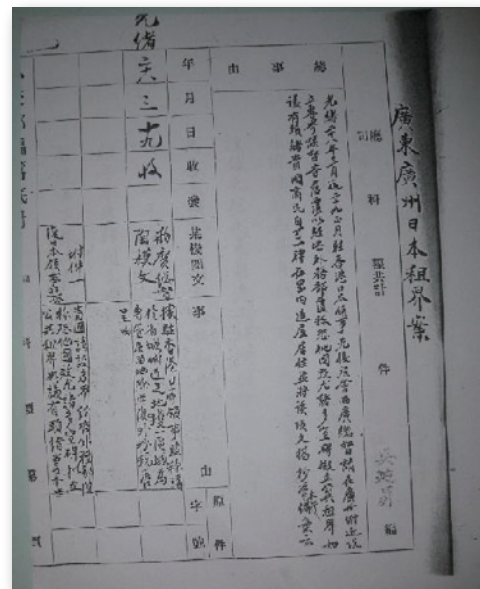


図1 資料「廣東廣州日本租界案」目次（台湾・中央研究院近代史研究所檔案館蔵）



孫 安石

「日本人が見た上海—『上海案内』の世界」

孫安石氏による第2報告は、従来の租界研究が主に租界の設定と発展に関連する制度的な側面を究明してきた研究成果を踏まえつつ、上海の共同租界の一角に日本人街を築いた日本人コミュニティの一端を上海で発行された日本人向けの旅行案内記『上海案内』を通して紹介するものであった。

それによれば、日本人を対象にした旅行案内は大きく分けて三つの時期区分によってその性格が大きく変わる。すなわち、1910年代から1920年代の中ごろまでは、『上海案内』（島津長次郎編、長崎県立図書館所蔵）に代表される民間の旅行案内が多く刊行された時期である。島津が編纂した『上海案内』は、上海の共同租界とフランス租界、そして、中国側の行政、財政、衛生などの部門について紹介するのは勿論、当時の上海での日本人、欧米人、中国人の生活を鋭い筆致で描いている。

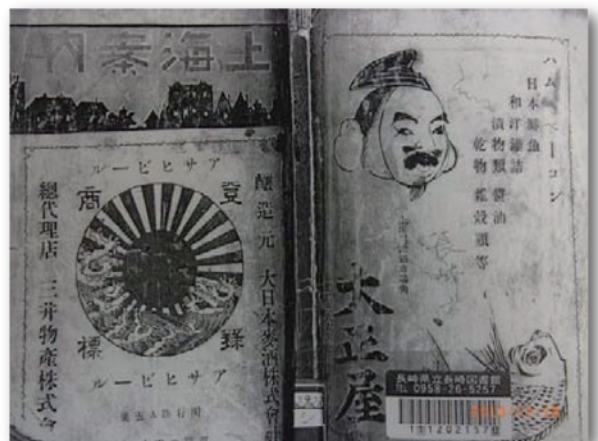


図2 「上海案内」（第1版、1913年の表紙、長崎県立図書館蔵）

ところが1920年代の中ごろになると、上海と日本との商工業はより密接なつながりを持つようになり、上海の旅行案内記にもその影響が及ぶ。ここで登場するのが上海日本商業会議所によって編纂された『上海概覧』1920年版、『上海内外商工案内』1935年、『上海要覧』1939年版などの商工業案内である。これらの上海案内書には、当時中国に進出した「在華紡」といわれる日本人の紡績業関連の情報が圧倒的に補強され、上海港の貿易に欠かせない船舶の停留地に関連する情報なども詳細に紹介した。

しかし、上海案内記に含まれる商工業に関連する情報の紹介は、1930年代の満州事変と上海事変を境にまたもや大きく変容する。すなわち、上海案内には、経済と貿易ではなく、戦争と軍事に関連する内容が増え、旅行と商工業に関連する情報の他に上海の戦跡めぐりに関する紹介が盛り込まれるようになる（日本国際観光局『上海』凸版印刷、1939年）。とくに、1935年に日本の外務省の主催で開催された東洋観光会議（日本、中国、満州、朝鮮、台湾、フィリピンなどが参加）は、政治が観光旅行をどのように取り込もうとしたのかを裏付けるものであることを指摘した。



袁 継 成

「漢口租界研究について」

第3報告の袁継成氏は、漢口における日本租界を含む各国の租界での経済活動や、宗教、教育、病院などの取り組みを詳しく紹介し、さらに各租界の回収状況に触れた後で、中国におかれた租界をどうとらえるかについ

て、次のように指摘した。

「租界は不平等条約の産物であり、列強の中国の経済に対する略奪、政治制御と植民地文化浸透の前衛拠点である。その存在は中国人にとっては恥の標である。具体的にいうと、第一に、中国領土の主権侵害である。第二に、中国の内政干渉である。第三に、列強の中国侵略と干渉の基地となった。第四に、中国の対外貿易をコントロールし、金融、港運を独占し、中国に対する経済侵略を拡大した。第五に、汚い物を隠す場、犯罪者と冒険家の楽園となった……。

しかし、世界の万事万物は複雑極まりないものである。租界自身が両刃の剣である。それは恥辱の標であり、苦難の落とし穴であり、外へ出ない中国人に侵略者の貪欲な夢と残虐横暴を見せつけ、近代文明の進歩と発展を見せつけて、自分の遅れや足りなさを知らしめて、自分と国家のあり方を変えなければと決心させるものでもあった。

苦難というのは常に進歩・発展に伴うものであり、これは、歴史上に稀にみる独特でまた繰り返し現われる現象である。客観的にいうと、まず、これは近代文明を示す窓口である。次に、これは中国の自然経済の解体と商品経済の発展を促した。第三に、これはまた中国の進歩的、革命的な人々の活動を擁護し受け入れた。第四に、これは都市建設と管理の見本であった。これらはみな租界当局の本意ではなかったものの、これが中国の近代化の誕生や発展に与えた影響は客観的に存在していた。

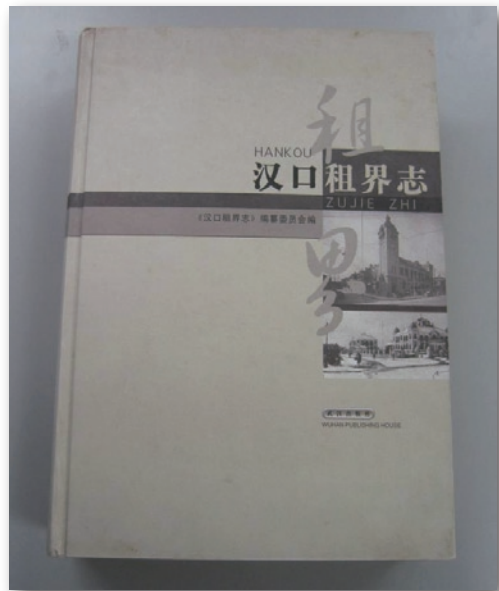


図3 袁継成氏の著書『漢口租界志』（2003年刊）

人類文明の発展というのは、いつも程度の高いものが勝利して程度の低いものにとって代わる。租界が示した先進的な生産方式や先進文化は、必然的に中国の立ち遅れた生産方式と時節に合わない文化を変えさせ、影響を与えた。租界の性質と役割については、歴史的、全面的に観察する必要がある。片方だけに固執すると、必然的に偏ってしまい、全面的で正確な歴史的な位置付けができなくなってしまうのである。」



李 愛 麗

「広州の租界研究と海関」

続く李愛麗さんの第4報告では、まず、広州沙面租界研究の概要が紹介された。

近代に広州沙面に置かれたイギリスとフランスの租界に関する研究は、上海、天津、漢口等の租界に関する研究に比べてはるかに少ないが、その主な原因は資料が不足していることにありとしつつ、いくつかの先行研究に触れた後、沙面租界の歴史の主な内容を次のように述べた。

1859年、両広総督黄宗漢と英・仏広州駐在領事は、広州城外の珠江北岸「中流沙」を租借し、かつ粵海関（広東税関）の税収中の広州「贖城」（広州の町が第2次アヘン戦争時期に英仏聯合軍に占領されたが、1858年に締結した「天津条約」でイギリスに400万両、フランスに200万両の白銀を払うことで聯合軍は退出して広州城を中国側に返すとしたことから、「金を納めて城を受け出す」と言われるようになった）に使う600万両の白銀の一部を、租界用の土地の埋め立てと運河の開削に充てることで合意し、1861年、英・仏の役人と両広総督勞崇光が正式に租地条約に調印した。

沙面租界の繁栄にマイナス要因として働いたのは、外国との貿易における広州の地位が短時間に上海に取って代わられたこと、沙面租界が一貫して中国人には開放されずに外国人だけが住んだこと、広州の人々に強烈な排外の気分があったこと等である。

両国租界はいずれも工部局と警察を設けて租界における行政や治安を維持したが、資料が足りないことから、沙面の工部局、商会等の企業、宗教組織、および社会生活に関する専門的な研究は、まだ十分とは言えない。

1925年6月23日、上海で起こった五三〇運動を支援して広州で省港大ストライキが起こり、デモ行進中の

群衆が沙基路を通過した際にイギリス租界警察の一斉射撃に遭った。この「沙基惨案」（沙基路における惨殺事件）を記念して、沙基路は六二三路と改名された。

1942年、日本が占領したイギリス租界を汪精衛政府に移管したことで、「特別行政区」ができ、1943年には汪政府下の広州政府に編入された。同年、フランスのビィッキー政権はフランス租界を広東省政府に移管し、ここに中国は沙面英・仏租界を回収したのである。

沙面の西洋建築と樹木は大部分が保存されてきて、さらに修理を施すことで、今日の沙面は広州で最も特色を具えた観光名所となっている。

李さんは引き続きご自分の専門である広東税関に関連した「1911－1913年広東税関による高雷常関接收管理の顛末」と題する報告を行ったが、その内容はここでは割愛する。

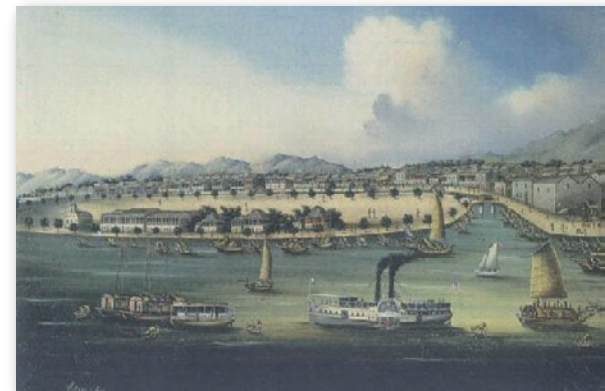


図4 沙面租界開設時の様子を描いた絵



図5 沙面旧租界の現況（手前の珠江と水路に囲まれた部分）



高 錫珪

「朝鮮近代史と木浦の租界」

第5報告で高錫珪氏は、19世紀末期の木浦開港の経

緯と近代都市木浦の形成、そして、近代都市木浦の特徴を紹介した。

報告によれば、1897年から1910年までの13年間に及ぶ木浦の開港は、

① 1897年10月～1898年2月－木浦港の基盤形成期として日本からの多くの移民者が到来した時期、

② 1898年2月～1905年12月－木浦開港場の建設期・葛藤期で日本人と朝鮮人との間で頻繁な衝突が起きた時期、

③ 1906年1月～1910年9月－木浦理事庁の管轄時代に入り、事実上は日本の植民都市に編入された時期に区分される、という。

日本の植民都市として編入された木浦の都市化は海壁工事から始まった。木浦の都市発達史は干拓と埋立の歴史と言っても過言ではなく、木浦は海上に立てられた都市であった。ところが、この海壁工事によって建設されたいわゆる「務安街道」は、「旧各国共同居留地」地域であり、また、日本人の街として発展する一方、土地のない朝鮮人の住居地は、内陸の墓地であった土地を住居地に変えながら造成された。朝鮮の人々の居住した地域は、当時から「豚小屋」と呼ばれるほど恵まれない土地であった。

植民地時期の木浦は、1926年に開催された「全南物産共進会」をきっかけに、「全羅南道の玄関」であり、多くの農業物産が集中する中心地として浮上し、朝鮮では第3位を占めるほどの重要な港湾に発展し、商業の要地となった。その後人口は徐々に増え、1935年10月にはついに6万を突破して、朝鮮の3大港の一つ、6大都市の一つとなった。

しかし、この時期でさえも朝鮮の人々が居住する地域の都市計画は遅れたものであった。約2万人以上の朝鮮人が居住する北橋洞を中心にした竹橋里一帯は、出発から「豚小屋」と言われたが、それから30余年が経過した時までも汚物が山のように積まれているなど、合理的な近代都市とはかけ離れている地域であったという。ところが、1930年以後になると人口の中心が朝鮮人村に移動するようになり、朝鮮人村にも新たな道路の建設が進み、徐々に変化が現れた。

高氏は、近代都市木浦の都市発展の特徴を植民都市の「二重性」という概念をもって説明している。それによれば、日本が朝鮮を植民地化したことは朝鮮の自らの主体的努力による都市の近代化を大きく歪曲するものであった。その結果、朝鮮半島の至るところで、日本人を中

心とした近代的な新都市と朝鮮人を中心とした伝統都市という二重構造に分離された。このような都市の二重性は、ソウル（当時の京城）の場合は朝鮮の人々の街＝鐘路＝北村と日本人の街＝忠武路・明洞＝南村という図式で代表される。そして、木浦の二重性は儒達山（ユダルサン）の南と北に分けられ、旧各国共同居留地＝日本人の街と旧木浦府の府内面＝朝鮮人の街として現れる、という。



図6 韓国・木浦の真宗大谷派東本願寺の木浦別院（撮影＝高錫珪）

最後に高氏は、木浦に現存する植民地時代の建築遺産を保存し、活用する市民らの取り組みについても紹介した。それによれば、木浦では、1999年に旧東洋拓植株式会社の木浦支店の建物の撤去についての議論をきっかけに、植民地時代の建築物を木浦の近現代史の文化資源として保存すべきかどうかをめぐる活発な意見が交換された。その結果、1999年11月には木浦の市民団体聯帯が主催した第1回「木浦歴史の街を歩く大会」が開かれ、多くの人々の反響を呼ぶことになった。このような市民運動は行政側をも動かし、2002年には木浦市によって「木浦市の歴史文化の街造成のための基本計画」が策定されるにいたったのである。この計画は近代の歴史文化遺産の保存および活用を通して、旧都心の経済の活性化を目標にしたもので、このような市民運動によって、2007年には旧東本願寺木浦別院（後には木浦中央教会）を撤去しようとする計画は撤回された。（会場からは、歴史的な意味のある建築遺産を保存することは容易ではなく、今後は各国の市民運動が連帯する必要があるとの意見も聞かれた。）



韓 東洙

「朝鮮の清国租界―釜山を中心に」

韓東洙氏による第6報告は、東アジアの居留地と租界の歴史との関係の中で比較的特殊な位置に置かれている朝鮮半島の清国租界地（とくに、釜山）に関する実体を紹介し、朝鮮半島に展開した日本の政治勢力と清国租界という空間の対応関係の究明を試みるものであった。

報告によれば、朝鮮半島に諸外国の租界地が登場したのは、1876年の釜山港を始めとし、1880年に元山（ウォンサン）、1883年仁川（インチョン）に続いた。その後、1897年には木浦（モクポ）と鎮南浦（チンナムポ）、1899年には郡山（クンサン）、清津（ソンジン）、馬山（マサン）にそれぞれ諸外国の租界が設置された。ところが、朝鮮半島に設置された清国租界（釜山、仁川、元山の三カ所に設置された）は、諸外国との間の不平等条約の結果として租界が多数設定された清国が、外国に設置した唯一の租界であった点で、東アジアの租界として極めて異例なものであったと言える。

また、1910年末の釜山の人口構成は朝鮮人が71,114名、日本人が24,936名、中国人を含んだ外国人が378名の合計96,428名であったが、日本人を除く外国人の中の絶対多数は中国人であった（356名）。それ以降、時期により増減を見せるが、1923年まで平均200人程度の中国人が釜山地域に常駐していることが分かる（朝鮮総督府総務部外事局『外国居留地統計』、1911年）。

当時、釜山に在住していた中国人の多くは、呉服商と料食業に従事しており、比較的大きな貿易商としては盛泰義、永発東、恒順和、瑞泰号（芝罘出身者による経営）と義生泰、徳聚和、瑞泰号（広東出身者による経営）が知られている（釜山商業会議所編『釜山要覧』、1912年）。

清国租界の概略を示す地図としては「釜山市街地全図」（1902年）と「釜山市街地及附近地図」（1903年）が知られるが、これによれば清国租界は、鉄道と道路の建設が始まり都市のインフラ建設が進んでいた日本人居留地とは対照的に、発展が遅れていた状況が読み取れる。

釜山の清国租界の筆地区分は「仁川、釜山、元山清国租界地章程」の添付資料「釜山清国居留地実測平面图」（縮尺1/1200、1910年）と「慶尚北道釜山府釜山面草梁洞原図」（合計28枚）によりその詳細を把握すること

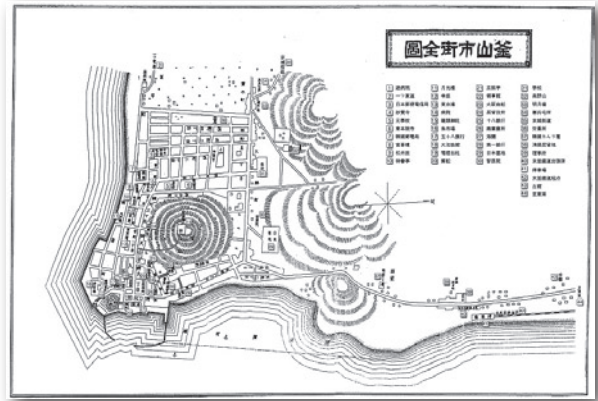


図7 釜山市街地全図（香月源太郎「韓国案内」、青木嵩山堂、1902年）



図8 「釜山市街地及附近地図」（釜山中区庁蔵、1903年）

ができる。この測量によれば、清国租界の1,2等地の筆地は大半が東西方向が長く、南北方向が短い細長型の形態が主流となっており、清国領事館が位置していたところを除けば大型筆地は殆どない。この筆地区分は、現在の地籍図と比較してもそれほど大きな変化はなく、街路の形態と規模、筆地の大きさもほとんどが本来のままで維持されていることが分かる。



富井 正憲

「東アジアにおける紡績工場―鐘紡社宅を中心に」

富井正憲氏による第7報告は、2009年の上海シンポジウムに引き続き、上海、青島、ソウル、光州、平壤に建設された東アジアの鐘淵紡績工場の社宅群を対象に取り上げ、それぞれの工場における居住環境の詳細を報告するものであった。

報告は、鐘淵紡績が戦前から国の内外において家族主義による企業共同体の構築を目指し、その具現化が鐘紡の工場村であり、シンボルとなった中心の建物が鐘紡の社宅であることを明らかにした。鐘淵の企業共同体の中心になったのは、武藤山治とそれを引き継いだ津田信吾の2人の家族主義の経営理念であった。鐘紡の工場村とは、一つ塙の中に工場と社宅、社員と労働者、日本人と中国人、日本人と朝鮮人が多数一同に集まって、共に働き、共に生活する新しいタイプの共同体であった。この時期に登場したアパートという共同住宅は、鐘紡にとっては最適な住居形式であった（『鐘紡100年史』鐘紡株式会社1988年）。

このような鐘紡の経営理念は、上海の公大紗廠（鐘紡支店）の厚生設備の充実ぶりからも裏付けられることを、



図9 朝日新聞大阪本社富士倉庫の写真所蔵状況

大阪朝日新聞の富士倉庫が所蔵する「上海F 012 - 18政治」の絵葉書（28枚）によって紹介した。

一方、鐘紡が植民地・朝鮮に本格的に進出したのは1931年の満州事変後のことで、1935年には光州に約7万坪の敷地に工員約2100名規模の全南工場が、続いて1936年京城（現ソウル）に8万坪の敷地に工員約3000名の永登浦工場が営業を開始し、1939年には平壤船橋里に約17万の坪敷地に第1期事業として工員約2000名の人絹工場が操業を始めた。

富井氏は、朝鮮半島に建設された最新式の鐘紡アパートは、日本において最も早い時期のアパートである東京市営住宅事業の古石場市営住宅（1926年竣工）や真砂町の独身者共同住宅（1930年竣工）と共通する部分が多いことも指摘した。



図 10 「鐘紡京城工場参観記」(『新産業』1936 年、粉河寺涼子著 韓国国立中央図書館所蔵)



内田 青蔵

「横浜居留地の歴史と建築」

第 8 報告で内田青蔵氏は、「昭和初期の建築様式にみる日本趣味あるいは東洋趣味の出現について」の副題をつけて、横浜居留地の歴史を建築の面から明らかにした。

1859 年に開港した横浜居留地は、1866 年に大火となり、建築は煉瓦・石造の耐火建築が奨励され、いち早く本格的な洋館が建設された。その洋館は 1・2 階にベランダを配するベランダ・コロニアル様式が採用されたが、明治中期になると正規の教育を受けた建築家たちの手になる古典主義系統の建物が出現し、構造的にも耐震性を考慮した煉瓦造建築へと変化していった。そうした中で、わが国最初期の耐震耐火性を求めた鉄筋コンクリート構造の建築も 1910 年代以降横浜では出現し、関東大震災以降に普及することになる。

また、関東大震災後は、建築様式の変化も見られる。すなわち、わが国では鉄筋コンクリート構造の普及の中で、1920 年代後半に帝冠様式というわが国の伝統や東洋趣味を意識した建築が出現した。この帝冠様式は、東アジアに進出しつつあった日本にとって国家を象徴するものとして、国内外に採用されたといわれているものでもある。この昭和初期に流行する帝冠様式の始まりは、1924 年に行われた神奈川県庁舎の設計競技によるいわれ、横浜居留地の建築が戦前期の建築界の動向を左右するほどの大きな影響力を持っていたことが窺えるのである。

総じて、横浜の歴史をふり返れば、1923 (大正 12)

年の関東大震災と 1945 (昭和 20) 年の大空襲という二度にわたる大きな被害を転機として今日に至ったのであるが、報告では、そうした不幸を乗り越えて横浜居留地の建築界は、開港以来構造的にも様式的にもわが国建築界をリードする建築事例を輩出してきたことを示し、あわせて、横浜居留地から始まった帝冠様式の事例について紹介した。



図 11 震災後に出現した日本趣味のインテリア・グランドホテル (1927 年落成) のフェニックスルーム



図 12 横浜から発信された日本趣味あるいは東洋趣味のデザインによる建築・神奈川県庁舎 (1928 年落成)

コメント

川島真氏は、今回の研究会では、租界、租借地、居留地など制度的に違う空間をいくつか取り上げて、同じく租界とか租借地といっても画一的に捉えることが出来ない状況を明らかにした点、租界を制度史の面からではなく、出版や住宅など別の空間から明らかにする試みをした点、中国のみか朝鮮の租界を取り上げて対比する視点を提示した点等に意義があると評価した上で、中国、朝鮮、日本における租界が置かれた状況の違いを制度のみ

かそこに住む人々の構成や生活の面からも明らかにする必要がある、回収されて租界や居留地がなくなった後の状況についても注目する必要があるのではないか、その点では木浦の文化財の保存などの気運の形式も大きな論点となるわけで、かつて租界や租借地であった空間が現代においてどんな意味を持つかということも議論できればよかった、と指摘した。また資料面では、外交史料館には関連の地図が多数あり、台湾の中央研究院には最近中国における租界回収関連の文書が多数入ったとの紹介がなされた。

続く貴志俊彦氏からは、これまでの神奈川大学における租界研究について、歴史のみか建築の視点を結びつけて取り組まれてきたことを評価しているが、それだけでは限界があるのも確かであるとして、今後は都市全体の構造を基本にして考える必要がある、建物だけでなく土木的視点を持ち、例えば中国の日本租界の建設に関わった東京建物は現存する企業であるから、その倉庫に保存されている資料を調べてみてはどうだろうか。また当然にも租界にはさまざまな仕事をしながら人々が生活していたのであり、彼らが税金を払っていたという視点から詳しく調べてみるのもおもしろいし、中国、朝鮮だけに留まらず、同様の空間が存在した他国についても関心を広げる必要があるのではないかと指摘があった。

さらに、吉澤誠一郎氏は、日本にあった居留地と中国にあった租界の違い、具体的には、19 世紀末日本の各地の居留地では、イギリスやフランスの運営がうまくいかず日本に返還したいと考えたのに対し、中国の租界の場合はそうではなく、全部ではないけれども発展した租界もあり、20 世紀に入ってもますます発展した、そうした違いがなぜ生まれたのかを考えることは、東アジアの近代史をとらえる上で非常に根本的な問題を含んでいるのではないか、と指摘した。さらに、川島さん、貴志さんも言われた回収や接収した後の租界がどのように変わったかを考えるのも興味ある課題であるし、清朝が自ら設けた「自開租界」といわれるものの実態がどうだったかもよくわかっていないことであり、この研究班の研究が今後も継続されて、いろいろな問題を明らかにして下さることを期待する、と述べた。



コメントーターの 3 人 (左から川島真氏、貴志俊彦氏、吉澤誠一郎氏)



全体討論の様子

まとめ

今回の研究会は、テーマのごとくに中国・朝鮮における租界研究のいまを反映した報告を行い、それについてコメントを頂載するという形で展開された。報告では、これまで取り上げることの少なかった中国の漢口、広州、朝鮮の木浦、釜山等の歴史や実情が紹介されたことは有意義であり、また、コメントでは、一定の評価を得ると同時に、不十分な点を指摘され、主催する側としてもそれを十分に自覚させられる会となった。今後中国における旧日本租界について、さまざまな角度から研究を深めるとともに、朝鮮における租界についても本腰を入れて取り組みたいと考えている。皆さんのいっそうのご協力、ご指導をお願いする (大里浩秋)。



公開研究会の様子

研究会報告

海外神社研究会

「台湾に渡った日本の神々」

日 時：2010 年 7 月 17 日（土） 15 時～

会 場：神奈川大学横浜キャンパス 1 号館 301 会議室

金子 展也（株式会社日立ハイテクトレーディング）

明治 28 年（1895 年）4 月 17 日、日清講和条約が調印され、台湾および澎湖島の日本への割譲が決定したことにより、日本の地にしか建立されなかった神社が新しく日本領土となった台湾へヒト・モノ・カネの移動に伴い守護神および氏神としてまず建立された。日本から分霊またはお札だけを持ち渡って祀られた庶民信仰であり、一般生活に結びついた稲荷や金刀比羅系神社が中心であった。また、新開拓地での事業の安全を願って建立された各種の企業構内神社でもあった。

一方で台湾総督府が国家シンボルとしての官幣大社台湾神社を造営し始めると、争うようにして各主だった地域で一斉に神社の建立が始まった。台湾統治上の必要性は迅速な日本化の浸透であり、その中に占める神道の神々を祀る神社は絶対的な権力の象徴でもあった。

台湾総督文教局社会課が昭和 18 年（1943 年）3 月に発行した「台湾に於ける神社及宗教」（昭和 17 年 12 月末現在）」によると台湾には日本統治時代の 50 年の間に遙拝所を含めると 201 社の神社が建立された。神社の建立に伴い、各神社には祭神が祀られ、一部の特殊な祭神はあるが北白川宮能久親王と開拓三神（大国魂命、大己貴命、少彦名命）を中心に庶民信仰の神々から皇室の皇祖神である天照大神まで合計 46 柱（台湾護国神社および建功神社の祭神は除く）の神々が海を渡り、特定の必然性をもって新しい領土となった台湾の地に鎮座した。そして神々の鎮座と神社の建立は統治政策に大に関わった。

本稿では神社が建立された日本統治時代の歴史的背景を考察することにより、統治政策および日本を取り巻く時局の変化と神社建立の関係を見ることが出来る。

① 大正 4 年：大正天皇御大典記念事業

即位の礼であり、天皇が皇位を継承したことを内外に示す儀典で、最高の皇室儀礼とされる。即位式の後に、五穀豊穡を感謝し、その継続を祈る一代一度の大嘗祭が行われる。

即位の礼・大嘗祭と一連の儀式を合わせ御大礼または御大典とも称される。

【対象神社：五間厩神社（台南州虎尾郡）、大林金刀比羅神社（台南州嘉義郡）、阿緱神社（高雄州屏東市）】

② 大正 12 年：皇太子の行啓記念事業

昭和天皇が皇太子の時、摂政の宮として大正 12 年 4 月 16 日から 4 月 27 日まで行啓した。摂政の宮とは天皇が未成年であったり、病気・事故により国事行為を行えない場合、天皇の名で国事行為を行うものをいい、皇室典範に定める順序により、青年の皇族が任じられる。この時期、新しい領地への視察として、台湾以外に朝鮮も行啓の候補に上ったが、最終的に安全性の面で台湾が選択された背景がある。

【対象神社：苗栗神社（台中州苗栗郡）、大崙社（台南州斗六郡）】

* 苗栗神社の造営は計画遅れにより最終的に昭和 13 年となる

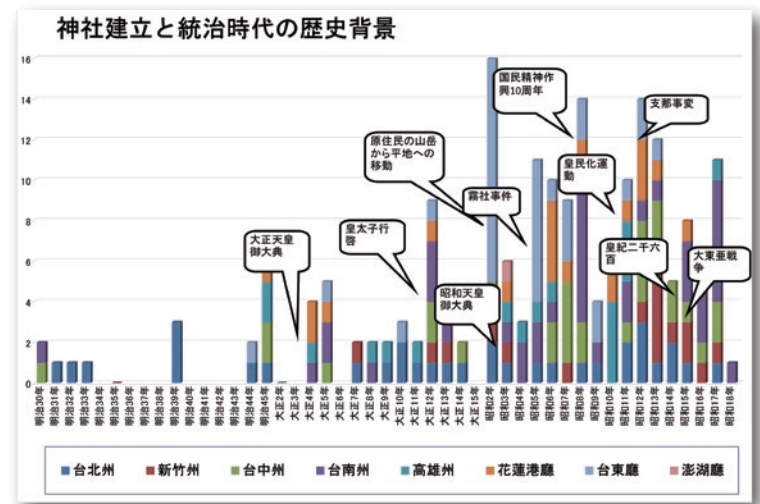
③ 昭和 2 年：山岳から平地への移動

第 5 代佐久間総督（明治 39 年～大正 4 年）時代に行われた「理蕃政策 5 カ年計画」が終わり、理蕃政策も順調に行われるにつれて、台湾総督府は原住民に山岳から平地での生活を指導するようになった。平地での統治が行われ、蕃童教育所（日本統治時代に設置された原住民児童に対する義務教育機関）などで日本語教育とともに神社を中心とした精神指導が駐在所の警察職員を中心に行われ、同時にこの頃に数多くの神社が建立された。特に台東庁のいわゆる蕃社（部落）に建立された神社（祠）が多かった。

④ 昭和 3 年：昭和天皇の御大典記念事業

【対象神社：大溪社（台北州大溪郡）、員林神社（台中州員林郡）、斗六神社（台南州斗六郡）、玉井社（台南州新化郡）、新化神社（台南州新化郡）、湾裡社（台南州新化郡）、澎湖神社（澎湖庁馬公街）】

表 1 神社建立と統治時代の歴史背景



⑤ 昭和 5 年：霧社事件

原住民に対する統治政策も順調に進んでいた時、能高郡蕃社霧社で大規模な蜂起事件が発生した。昭和 5 年 10 月 27 日、当日は霧社管内の小学校と公学校および教習所合同の運動会の日であり、数多くの日本人と台湾漢人の児童や父兄家族および子女約 200 人が集まっていた。国旗掲揚のとき、蜂起したタイヤル族が蕃刀と銃をもって乱入し、日本人と一部の漢人 136 名が殺害された。この蜂起に対して総督府は軍隊を派遣し、徹底した報復処置に出た。この掃討の過程で 276 人のタイヤル族が殺害され、さらに収容された蜂起蕃の内 216 名が殺害される事件も発生した。台湾総督府は原住民に対するより一層の監視強化と神社を中心にした徹底した日本教育を改めて行った。したがって、この年よりの数年間は特に原住民の多い台東庁と花蓮港庁において神社が建立された。

⑥ 昭和 8 年：国民精神作興 10 周年記念事業

関東大震災直後の大正 12 年 11 月 10 日、国民精神の強化振興から出された詔書が、大正天皇の名により出された。その後 10 年経った昭和 8 年は満州国樹立による国際情勢の緊迫化と国家非常時体制下、第 16 代総督として就任した中川健蔵（昭和 7 年～昭和 11 年）は一致団結して、国難を克服することを訓示した。

【対象神社：鳳山神社（高雄州鳳山郡）、岡山神社（高雄州岡山郡）、東港神社（高雄州東港郡）】

⑦ 昭和 11 年：皇民化運動

第 17 代総督に就任した小林躋造（昭和 11 年～昭和 15 年）の時代は折りしも国家非常時体制が叫ばれ、政府内では軍部が発言力を増していた時でもある。軍国主

義台頭の時期であり、台湾の南進に向けての政策が明確になった時期でもあった。小林総督は就任早々皇民化教育と鍛錬の徹底を行い、日本精神の高揚を実践して土地の風俗・民間宗教を含めた生活習慣の日本式への改善を奨励した。この一環として国語家庭の認定・改姓名運動・各地の神社造営・学校生徒および各団体による集団参拝、宮城遙拝、各家庭での大麻奉斎などが行われ、家庭で神棚が祀られた。また、この時期、数多くの台湾古来の寺廟が取り壊された。

【対象神社：汐止神社（台北州七星郡）、海山神社（台北州海山郡）、桃園神社（新竹州新竹市）、中歴神社（新竹州中歴郡）、清水神社（台中州大甲郡）、秀水神社（台中州彰化郡）、竹山神社（台中州竹山郡）、南投神社（台中州南投郡）】

⑧ 昭和 15 年：皇紀二千六百年記念事業

台湾神社歴史においては大きなイベントであった。この記念事業として新たに神社が造営され、また、既存の神社の改修・改築・遷座・設備の拡充が行われた。

皇紀とは、明治政府が定めた日本独自の紀元で、明治 5 年に明治政府が、神武天皇が即位した年を皇紀元年とした。皇紀元年から昭和 15 年は数えて 2600 年となることから、神武天皇、皇后を祀る橿原神宮と神武天皇の御陵の拡張整備、代々木の天皇陵の参拝道路の改良などが行われた。

【対象神社：竹東神社（新竹州竹東郡）、頭分神社（新竹州竹南郡）、竹南神社（新竹州竹南郡）、鹿港神社（台中州彰化郡）、能高神社（台中州能高郡）、魚池神社（台中州新高郡）、北港神社（台南州北港郡）、林内神社（台南州斗六郡）】

「日露戦争前後の朝鮮半島における 灯台建設と日本」

日 時：2010 年 9 月 3 日（金） 16 時～
会 場：神奈川大学横浜キャンパス 21 号館 4 階 405 号室

谷川 竜一（東京大学生産技術研究所 助教）

アジアの近代は、海の灯台から。ここ数年私はそう思っている。灯台は暗黒の海に光をともし、人々をつなげていく。それは様々な文化や考え方、技術や資本の海を越えた移動を支えるものであり、それによって 19 世紀のアジア社会は大きな変動を迎えることになった。移動を支える、といえは響きは良いが、一方でそれは帝国主義の時代であった当時、日本や欧米列強の重要な侵略の道具でもあった。私はその両面を読み解きながら、近世と近代のはざまに起こる灯台建設という出来事を通して、何が受け渡しされた／されなかったのか、その視野をアジアの海域へと広げたときに何が見えてくるのか、ということに興味を抱いている。その中で本発表では、特に帝国主義の道具としての灯台の側面に絞り、近代日本が海を通じて大きな軍事的・政治的影響力を伸ばし獲得した、日露戦争前後の朝鮮半島の状況を検討した。

高性能なレンズを装備した近代的な灯台は、19 世紀半ばから、東アジア、東南アジア海域に出現する。最初は西洋と大航海時代からつながってきた海辺の都市などから点灯が始まり、日本が明治維新を迎えると、一気に日本の太平洋岸で灯台が点灯した。また、中国の開港場付近やハワイでも同時期（1860～70 年代）に多くの灯台が点灯している。これらは、太平洋を渡ってアメリカへ向かう航路の整備などと連動していることは明らかである。そして日露戦争以後は日本の植民地化によって一気に朝鮮半島で灯台が建設され、同時にアメリカによる植民地化が進んだフィリピンなどでも一斉に点灯した。そうした灯台の点灯を見ていくと、アジアに日本や欧米列強が植民地支配を広げる中で、最初に建設した建造物が灯台であったことが分かる。アジアではとりわけ日本が灯台を熱心に建設し、ミャンマーからハワイまで（オーストラリア周辺を除く）のアジア太平洋海域で 19 世

紀半ばから第一次世界大戦終結までに点灯した灯台のおよそ 3 割を建設した（表 1 参照）。

一方で灯台は、付近を航行するすべての船に、安全な航路情報を提供する「公益」を目的にしたインフラストラクチャーでもある。台風で波が高くなれば避難港を示し、暗礁地帯や航路の変更地点を教えてくれる公共的な建造物である。そのために、例えば 20 世紀初頭の韓国において、開港以後に蓄えられていた海関税の用途をめぐって、列強たちが利権争いを繰り広げた際、灯台の建設は列強一同が納得できる（拒否できない）落としどころとなった。本発表においては、この韓国の海関税収入をめぐる列強の利権争いが、最終的に日本による灯台建設へと方向付けがなされていく過程を考察した。いわば灯台の持つ公益性を隠れ蓑にして、日本が東アジアの灯台建設をリードしたわけである。ただし、そうはいつても日露戦争まではイギリス人の総務司が韓国沿岸の灯台建設を取り仕切っており、日露戦争を契機にしてはじめて日本がその建設へゲモノーを強引に握ったのであった。特にイギリスで灯台建設の専門教育を受けた一人の日本人技師が、大きな役割を果たしながら、日本海海戦までに朝鮮半島の灯台建設を間に合わせた。そして戦後

灯台数			
	日本によって建設された灯台	全灯台	
～1849	0	0.0%	4
1850～1859	0	0.0%	7
1860～1869	2	6.3%	32
1870～1879	33	54.1%	61
1880～1889	19	20.4%	93
1890～1899	61	48.0%	127
1900～1909	64	23.1%	277
1910～1919	79	28.9%	273
合計	258	29.5%	874

表 1 1919 年までにアジア太平洋海域で点灯した灯台とその内の日本が建設したと考えられる灯台の数

朝鮮における構造材ごとの灯台建設数と帝国全体対応表								
		木造	鉄造	コンクリート	レンガ	石造	その他	合計
1903～1905	朝鮮	1	0	0	2	2	1	6
	帝国(朝鮮除く)	2	4	1	0	6	0	13
	帝国全体	3	4	1	2	8	1	19
1905～1910	朝鮮	0	4	26	4	0	0	34
	帝国(朝鮮除く)	0	4	2	3	2	0	11
	帝国全体	0	8	28	7	2	0	45
1911～1919	朝鮮	0	2	6	11	0	0	19
	帝国(朝鮮除く)	2	15	24	3	3	0	47
	帝国全体	2	17	29	15	3	0	66

『東洋燈臺表』上巻、水路部、1924 年、同・下巻、水路部、1925 年より筆者作成。

表 2 韓国における構造材ごとの灯台建設数と帝国全体の灯台の建設数

は、日本人が総務司として入り、灯台を大量に建設してゆくことで朝鮮半島沿岸の航路の「近代化」や植民地化を進めていった。

その中で灯台の構造、材料、点灯年、場所、建設の様子などを見ると、例えば日露戦争後の韓国における新設灯台は、コンクリート灯台に偏っていたこと、加えて帝国日本の版図の中ではほとんど灯台建設が進んでいない一方で、朝鮮半島沿岸においては集中的に灯台が配備されたことなどが明らかとなった（表 2 参照）。発表では、その理由を建築材料や生産体制などに求めて論証した。一言で言えば、コンクリートが石材などと比べて施工上の技術的ハードルが低いこと、鉄材などに比べて価格が安いこと、にもかかわらず高い耐久力を誇る点や、当時のいわゆる外地に進出したセメント会社とスムーズに連携できたことなどがあげられる。朝鮮半島の植民地化を急ピッチで進めるということは、材料の特性や材料が要請する技術的な要素と不可分であったのだ。

こうしたことを通して、日露戦争前後において日本が朝鮮半島における灯台建設に全力を傾け、それがいかなる技術や人々によってなされたかを明らかにしたが、本発表ではいくつかの検討せねばならない問題も浮かび上がった。例えば灯台の数量分析を行う上で大正期の日本海軍が作成した資料『東洋灯台表』を私が資料批判を十分に行わずに利用したことに対する甘さや、あるいは形態そのものが持つ意味をほとんどここでは問わなかったことに対する同じ専門分野である建築史からの批判、また、19 世紀末から 20 世紀初頭の東アジアの国際情勢を語る上で、日本の資料のみを利用している点など（逆に中国の状況をもっと見なくてはならないことなど）、発表では多くのご批判、アドバイスを頂いた。また私自身の反省としては、朝鮮の人々が灯台をどのように受け

取ったのか、ということを描ききることができていないことにも力不足を感じている。

これらのアドバイス、ご指摘は、どれもが私にとって大変有意義であり（というのも、そもそも灯台を通して近代史を語る研究者は他にほとんどいないので、コメントをもらう場が極めて少ないのである）、今後の大きな糧となったと感じている。少しずつではあるが、この機会を得た多くのことを、今後の論文などでお返ししていければと思っている。最後になりましたが、孫先生、韓先生、及び当日の参加者の皆様、貴重な機会・アドバイスを下さり、ありがとうございました。



写真 1 1903 年に点灯した韓国で最も古い灯台の一つ、八尾島灯台

三つのミュージアム

—“ムラ”の後退と只見町インターネット・エコミュージアムの意義—

佐野 賢治（非文字資料研究センター 研究員）

基幹研究、統合情報発信班は、21 世紀 COE プログラム事業を継承し、只見町と連携を取りながら只見町インターネット・エコミュージアムのコンテンツの内容充実とその発信法を、①只見町の俯瞰写真 ②自然と暮らし ③只見町の屋根葺職人 ④只見町所蔵民具検索 の4 分野に分けて進めてきた。しかし、生業、年中行事から民具まで、実際、盛時を再現して高精細映像で撮りためた資料の活用や、ウェブ上での特別展ともいえる屋根葺職人に続く個別テーマの番組化、民具のクロス検索のシステム開発など取り組むべき課題はさまざま残されている。

その一方、豊かな自然と民俗文化を有する只見の地も少子高齢化の波に洗われ、民具を製作・使用した住民自身が収集し、整理し、記録カードに書き込む只見方式として民具学界で知られる民具の整理・記録・保存運動に従事した古老たちもその多くが鬼籍に入られた。「孫に伝える」ということがその活動のモチベーションになっていたが、その子供たちの声も村里では聞えなくなっている。このような現状の中で、われわれの目指しているインターネット・エコミュージアムのシステム開発を進める意味を再度、確認しておきたい。

“ムラ”の後退、戻る“自然”

このところ、全国的に熊やイノシシの人里への出没と人身への危害、猿や鹿による被害のニュースがテレビ・新聞を賑わしている。野猿が栽培シタケを食べる量以上に糞ぎ払い、柿をもいで老人に投げつけるなど、現代版サルカニ合戦と笑ってすませる程度はすでに超えている。早川孝太郎が『猪・鹿・狸』（1926）を著した時代は、人間側が自然界に干渉、侵入し、動物たちの人間界への対抗策が話のモチーフになっていた。それ以前は、自然界に対する人間側の畏怖が、「山の神」信仰などを醸成し、「自然－カミー人」の三者関係が緊張を含

みながらもバランスをとって持続していた。それがここに来て、自然界に人間が押し戻される状況である。「山の神」に山の幸を願い、熊との知恵比べを語った鉄砲打ち世代はすでに世を去り、腕自慢の猟友会の会員も年々数が少なくなっている。

人口減とともに、領域としてのムラが縮小している。いわゆる平成の大合併の結果、総務省によると 3229 市町村 (1999. 4.1 現在) は 1727 (2010. 3.31 現在) と約半減し、行政上の村は、568 から 184 と三分の一以上に減じた。国土交通省がまとめた過疎地域を抱える全国 775 市町村に対して、その管内に所在する 62,273 集落の状況調査 (2006 年) によると、65 歳以上の高齢者が人口の半数以上を占める高齢化集落が 7878 集落 (12.7%) 報告されている。高齢化集落は、集落自治から生活道路の管理、冠婚葬祭まで、共同体としての機能が維持できない、いわゆる「限界集落」であり、当事者にとってはあまりに非情であり、胸を刺す言葉である。只見町の 2010 年の高齢化率は 41.4% (国平均 23.1%)、高齢化集落のライン上にある集落が 5 つほどある。統計上は判っていても、どこの集落が該当するのかは町の職員も言いにくい雰囲気である。廃屋の姿は寂しいし、豪雪のこの地では数年の内に倒壊にいたる。

集落の歴史はもとより人々が自然に働きかけ作り上げてきたムラ景観の変遷の検証もわれわれのプロジェクトのテーマの一つだが、今後は、ムラが元の自然に戻る過程も考慮しなければならなくなる。先日、帰宅後、「人類滅亡」という人がいなくなった後の世界の変化を 50 ～ 200 年単位で再現したヒストリー・チャンネルの番組をたまたま見、人が自然の生態系を乱したその後の影響の大きさに驚いた。

人の自然に対する開発の歴史を逆にトレースすることは、自然が元にかえる導きとなる。放棄された山田に、

杉苗を植えるのではなくその地の広葉樹の苗を植えることは、人ができる自然界に対するせめてもの配慮といえる。自然からの撤退法を蓄積された民俗誌から学び取り、その実践を記録することは後世に残す非文字資料となる。

只見の自然とエコミュージアム

「只見町インターネット・エコミュージアム」では、自然と人の交渉は、4 分野の内の「②自然と暮らし」のコーナーで、民具を介在させ、自然－〈民具〉一人のコンテンツとして構成していく方針であるが、民具の製作・使用法について語れる古老が少なくなる一方で、ブナ林をはじめ、アバランチシュート (なだれ地形)、ユビソ柳の群生など世界的にも誇れる自然景観や多くの珍しい動植物の生態など、豊かな自然を只見町は眼前に示してくれている。

町では「自然首都・只見」を 2007 年 7 月 27 日に宣言。ふるさとの自然を改めて見直し、そのすばらしさと恵みに感謝し、次世代に継承する努力を町民にアピールし、その具体的運動としてユネスコの「エコパーク (生物圏保存地域)」認証を現在、只見町ブナセンターを活動拠点として目指している。エコパークに登録されると、原生的な自然を厳重に保護する「核心地域」、教育や学術研究で活用する「緩衝地帯」、人が生活や経済活動ができる「移行地域」の 3 地域に区分されて、人間と自然との共生がはかられる。この動きに連動して、町では従来の「川の歴史博物館」を、ブナを中心とした只見の自然景観を展示で再現し、「ただみ・ブナと川のミュージアム」として 2009 年 10 月 3 日リニューアル開館した (写真 1・2・3・4)。

エコミュージアムは、1960 年代にフランスの G・H・リヴィエールが提唱した住民主体の新たな地域博物館運動といえるが、日本エコミュージアム研究会 (会長：大原一興横浜国立大学教授) では、2009 年の総会で日本のエコミュージアムを、「地域社会の内発的・持続的な発展に寄与することを目的に、一定の地域において、住民の参加により環境と人間との関わりを探る活動としくみである」と定義、「多様な自然環境とそこにおいて成立した有形無形の生活・文化・産業の遺産や記憶・様式等を、過去・現在・未来を通じて、総合的・統合的」に対象とするものとし、地域資源を学習、調査・研究、保全・利活用する機能を前提として、「(学校)－地域を学び知り、地域をつくる担い手を育む住民の学校として、交流、教育、展示普及、(研究所)－地域のための研究所

として、専門家と共に科学性をふまえ学際的な調査・研究、(保全機関)－多様な自然や生活文化を含む地域資源の保全機関として、記憶の収集および持続的利活用」する活動を行い、それを推進するしくみとして「専門的職員を配し、地域の各分野や利用者の参加による企画運営、専門家との連携による学術的研究についての組織」を構成するものと憲章化した。

只見方式の民具保存活動から「自然首都・只見」運動まで、只見町の住民と行政当局の自然と文化に対する一体的な取り組みは、まさにエコミュージアムの理念に重なる。町では「自然首都・只見」応援基金をふるさと納税の対象とし、キータムに、「1. 豊かな自然の代表である世界遺産級のブナの原生林、2. 全ての生命の源である豊富な水を生み出す雪、3. まちづくりの根幹となる郷土を愛する人」を掲げ、その使途を「1. ブナを核とした、2. 雪と共存する、3. 次世代を担う子どもたちの教育充実」のまちづくりに関する事業に充てるとした (図 1)。

地域の担い手の養成については、地域資源全てを学習対象として自然や民具学習の博学連携、町民向けの「只見学」を推進、スケールの大きな自然環境の中での生活

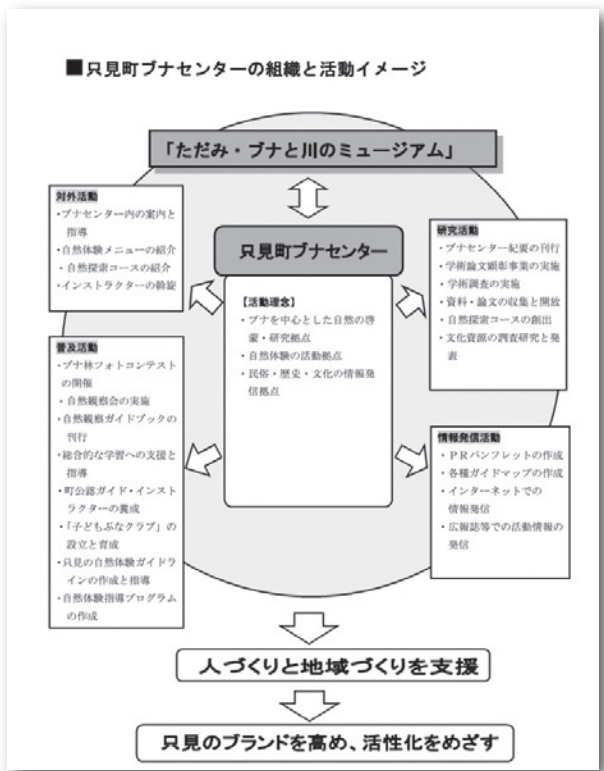


図1 只見町ブナセンターの組織と活動イメージ (只見町ブナセンター・ホームページ <http://tadami-buna.sakura.ne.jp> より)

を通した人格形成を目指すことを明言し、具体的には存続の間われる県立只見高校の継続運動に力を入れている。神奈川大学はささやかではあるが、日本常民文化研究所が「只見常民大学」を開講、非文字資料研究センターが只見町インターネット・エコミュージアムはじめ研究方面で協力し、法学部自治行政学科は只見高校からの推薦枠を設け、町づくりの人材育成に協力する協定を結んでいる。地域社会と大学の連携の一つのあり方といえる。

只見の博物館とインターネット・エコミュージアム

只見町には、「ただみ・ブナと川のミュージアム」（自然資料、上町）のほかにも、只見考古館（考古、大倉集落）、河合継之助記念館（歴史、塩沢）、叶津番所（豪農民家、叶津）など各分野にわたる博物館施設があり、ハード面、箱物としては恵まれた現況といえる。しかし、国指定有形民俗文化財も含む民具類は旧朝日町公民館（黒谷）に収蔵されているものの、民俗資料を専門に展示公開する施設は今のところない。

ここで、a〈ミュージアム〉—b〈エコミュージアム〉—c〈インターネット・エコミュージアム〉の関係を簡潔に整理してみる。それぞれの性格は要約すれば、〈施設における実物展示・保存〉—〈住民主体の地域認識・振興運動〉—〈地域情報の分析・公開・DB化〉となり、さらにその特質を強調すれば、〈展示・保存(保全機能的)〉—〈教育(学校的)〉—〈研究(研究所的)〉となる。この三者の関係は、例えば主に関わる人から見れば、aは特定できる参観者、bは地域の住民、cは不特定な多数者など、その他さまざまな視点、要素から捉えることができる。

先述した、市町村合併は財政的に箱物としての複数の博物館・資料館の維持を困難にし、統廃合が検討され、民具資料に限っていえば複数の同一資料は代表的なものを残し廃棄処分の対象になるなど危機的な状況が全国各地から報告されている。従来、市町村の民具資料は多くの場合、博物館や資料館がある場合は別として、廃校舎の空き教室に収蔵されるなどして保存されてきた。それが、ここにきてその施設、民具自体の存在が脅かされてきている。いずれにしろ、先人が苦労して収集した普通の人々のくらし、常民の歴史を描くための非文字資料ともいえる民具が、展示資料や学術資料として日の目を見ることなく省みられなくなっている現状は嘆かわしい。

このような中で、只見町の民具は住民自身の手によっ

て整理・記録・保存され、郷土の再認識の資料として位置づけられている。民具を製作・使用した古老の記憶は一点一点カード化され、優れた学術研究資料としてウェブ上で公開された。只見町ではa〈ミュージアム〉—b〈エコミュージアム〉—c〈インターネット・エコミュージアム〉、三者の関係の基盤整備が整ったといえる。ただし、民俗資料に関するa〈ミュージアム〉は、不十分といえ、記録カード類などが収められている旧只見中学校舎を活用しての民俗資料館建設構想の実現が期待される。旧只見中学校は、「ただみ・ブナと川のミュージアム」に隣接しており、山樵や川漁の民具の現物を、只見川を真近にして参照でき、また川漁の実際を近く of 古老からも聞け、使用可能な民具を用いての実験なども試みることができる好条件の地である。

一方、よそ者であるわれわれ研究者が関与するのは、c〈インターネット・エコミュージアム〉である。全世界と瞬時に結ばれ、大容量のデータを記憶し、検索すれば直ちに望むデータが引き出せる小さな箱物・パソコン上のインターネット・エコミュージアムは、なりは小さくても、ただ、そこに現れているものが実物ではないということを除けば、巨大な建物の博物館に引けをとらない。

インターネット・エコミュージアムの可能性はさまざまである。例えば、名人級の元山（杣）のノコギリの高精細カメラ映像を利用した使用痕の分析から、聞き書きでは判らない、カンとかコツといった民俗技術の解明の糸口が見いだせるかもしれないし、パソコンの扱いを通して祖父母と孫の世代間交流が図れる。標準・共通名称の設定が困難な民具研究において、サムネイルなどを活用して図像による検索から国際比較までその研究上の応用分野は広い。相互交流型のブログなどを通しての情報交換も有意である。何よりも、インターネット・エコミュージアムには、大面積の展示スペースや収蔵庫は不要であり、データの集積は無限といってもよく、その分類・検索機能はさまざまに工夫できる。今後、ますますムラが後退し、箱物としてのミュージアムの維持、運営が厳しくなる中で、地域の民具資料は、エコミュージアム、インターネット・エコミュージアムの視点から扱われる方向性が必要である。只見町インターネット・エコミュージアムはそのモデルづくりの試みともいえる。

地域社会における箱物としての博物館・資料館・収蔵室の運営・維持は、ムラの後退という状況の下で、今後

ますます難しくなっていく。その流れの中で、パソコンという小さな箱物を活用したインターネット・エコミュージアムの意義を只見町の例で考えてみた。言うまでもなく、実物展示や実物の収集・保存にあたる従来型のミュージアム、住民を主体とした地域認識・振興運動といえるエコミュージアムとインターネット・エコミュージアムの三者は相互補完的な関係にあり、三者の並立・協力が理想的な姿である。

庶民の生活誌の研究、生活史構築に欠かせない非文字資料としての民具は現在国内の関係するミュージアムにどれほど、収蔵され、展示されているのだろうか。単純に1000館で最低1000件でも百万件、点数にしたら

その数十倍の実物資料が収蔵されていることになる。やがては廃棄や消滅の危機にあるこれらの民具の現時点でのデータベースの作成が少なくとも早急に望まれる。エコミュージアムにしても、少子高齢化に伴う住民自体の減少と不在は運動自体を成り立たせなくしてしまう。

ムラの生産・生活活動の証となる民具のデータベース化を踏まえ、世界の諸民族、地域の民具の比較研究から人類文化の体系化を導く可能性を秘めたインターネット・エコミュージアムは、民具資料に限ってみてもその有効性が高いのである。



写真1



写真2

写真1・写真2 「ただみ・ブナと川のミュージアム」の外観 すぐ近くを只見川が流れている



写真3 館内の展示パネル
水槽プールでの魚類の生態展示、ジオラマ・模型展示、昆虫標本、体験学習など展示はさまざま工夫されている



写真4 「ただみ秋の実り展」に町民が持ち寄った毒キノコの展示

“目と足を通して” 理解した日本の文化

韓 東洙（非文字資料研究センター外国人研究員・研究協力者
漢陽大学校建築学部教授）

今年の3月末から非文字資料研究センターの客員研究員として1年間横浜に滞在することになった筆者は、短期間の旅行ではなく、初めて日本で生活しながら日本の文化を理解する機会を得られるようになった。筆者は2011年に韓国ソウルと水原で非文字資料を利用した展示会ⁱを準備しており、そのためにも滞在中にしておかなければならない事として二つの目標をたてていた。

一つは、私の住んでいる横浜と、ここから遠くない東京、この二つの都市における空間の構造とそこで生活している日本人の暮らしを理解することであった。もう一つは、博物館・美術館・記念館などで開催される様々な特別展示会、あるいは常設展示会を通じて非文字資料の活用方法を直接経験して理解することであった。

前者に関しては、筆者が10余年にわたる中国での留学生活を通して、台北と北京の都市を徹底的に経験し、それにより台湾と中国の文化はもちろん、中国人の暮らしにも深く入り込む事ができたからでもある。このような経験から、留学を計画している教え子達にも、自分が留学する街については、必ず徹底的に理解するようにアドバイスしている。

日本においても筆者のこのような考え方は変わらず、同じ方法を通して横浜や東京も理解しようとしている。特に、今滞在している横浜国際学生会館や神奈川大学の周辺という横浜の都市については、ほとんど目と足を通して確認すべきだと思う。実際に歩いてみた場所は地図に表し、同じ地域に行く場合にも出来る限り違う道を選択して歩くことで、経験の幅を広げようとしたのである(図1)。

しかし、東京は横浜と違い、とても大きな都市であり、

いつも横浜に帰らなければならないという負担があるため、あらかじめ主要地点を選択し、その周辺は歩いて回り、主要地点への移動は電車を利用する方法で、何回も主要地点を往来したのである。ただし、電車を利用する時に、交通費を気にせず迂回することになったとしても、出来るだけ重ならない路線で行こうとした(図2)。そうするうちに6ヶ月が過ぎた今では、ある程度二つの都市の主要な空間に対しては基本的には理解しているし、表面的でありながらも、その中に含まれている日本人たちの暮らしを観察することができた。その印象を一言で要約するには難しいが、持続する堂々たる大都市、細胞の増殖のような空間の拡張、という表面的なイメージを持っている。そして、偶然見るようになった『空から日本を見てみよう』というテレビ番組から、自分の手で作って来た都市への彼らの自負心が感じ取れた。それだけではなく、現在建設中である東京のスカイツリーを通しては、自然への挑戦に対し、再挑戦する不屈の意志も垣間見ることができた。

そして、二番目の目標に関しては、展示会に関する情報をまず広範囲に収集し、ひとまず筆者の専攻と来年の展示会に直接関連がある建築および都市の展示、もしくは



図1 横浜の地図上に表示した筆者の踏査した道(赤線)。横浜の場合は東京と違い、大部分の道は歩いて回った。

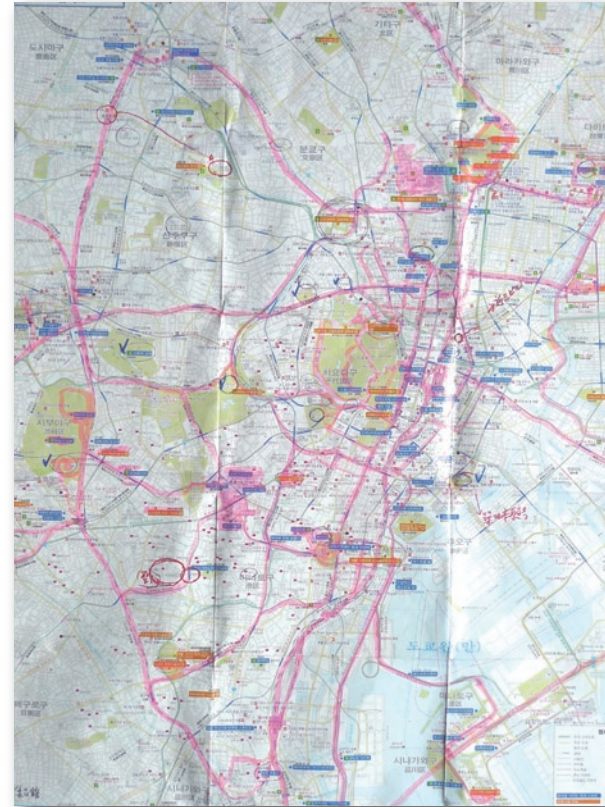


図2 東京の地図上に表示した筆者の踏査した道(赤線)。

は1930年代の近代期に関わる展示を優先的に選択して観覧した。また、週末には時間が許す限り東京と横浜はもちろん、周辺の地域に散在している様々な展示空間も見に行ったのである。ⁱⁱ たまたま今年は展覧会が多かったのかも知れないが、建築および都市に関する立派な展示会を多数見られたことも幸運だったと思う(図3)。その中で最も印象の強い展示は、東京国立近代美術館で開かれた建築家7組による展覧会「建築はどこにあるの? 7つのインスタレーション」であった。年齢を越えて現代建築の座標に対して悩む日本の建築家らの姿から、日本建築の現在を発見したと思っている。また、近代期に関する展示会も非常に多く開かれ、最も最近見たものは横浜都市発展記念館で開かれた『モダン横浜』という展示会だったが、それほど大きくない小規模の展示だったのにも関わらず、主題を表わす優れた展示の技法から多くを学ぶことができたので、来年の展示会にも役に立つに違いない。そして、一つ羨ましかったのは、どのような主題の展示会でも、多様な展示物が取りそろえてあるという点であった。それは恐らく資料の整理と保存、絶え間ない再生産の結果と考えられる。例えば、都市景観の変遷を展示する場合、主には100年前と50年前を比較する展示会でも、それにとどまらず、30年



図3 2010年10月8日以後の2週間内、見に行った展示会のパンフレット。

前と現在の姿まで比較しながら、持続的に現在の姿を整理していることから、それ自体が将来に開かれる次の展示会につながると感じた。さらに、展示物の充実もさることながら、その内容を深く理解できるように展示空間を造る技術も非常に高いと思われる。もちろん、日本と韓国の展示会を直接比較するのは難しいが、基本的に韓国でも建築や都市に関する展示の機会を増やし、展示物の信憑性も高められればと期待している。

もう、日本滞在期間はそれほど長く残っていない。日本に来てから今までは、「目と足を通して」日本の文化を経験することを目指してきた。それは筆者の言語能力が足りないことにも起因する。日本語の勉強には相当な努力を傾けているが、自分の語学センスが足りないせいか、今も相変わらず十分なコミュニケーションはできない。今後また、日本に来る機会があるならば、その時は言語を通じて人に会い、文字を通じて文章を読み、日本の文化を理解したいと思う。最後に筆者が日本の文化に最も近く近付けるように、このような大切な機会を与えてくれた神奈川大学の非文字資料研究センターの方々にお礼を申し上げたい。

(翻訳：徐東千、非文字資料研究センター研究協力者)

ⁱ ソウルでの展示会は、主題が〈1930年代京城の街の風景：鍾路と本町〉で、水原での展示会は、主題が〈世界文化遺産華城と建築図面〉である。
ⁱⁱ 今までみた展示会は約80箇所余りとなる。つまり、週に少なくとも3-4箇所は行ったことになる。

瀬戸内海歴史民俗調査と中島ミカン

森 武麿（非文字資料研究センター 研究員）

私は 2009 年に神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科の教員となり、すぐさま日本常民文化研究所兼任となった。その年の 9 月には、同研究所の「瀬戸内海の歴史民俗調査」の第 1 回調査がスタートした。私は、ただちにこの愛媛県松山沖の二神島共同調査に参加することになった。正直、わけもわからないうちに共同調査に加えられたという感じであった。

もちろん、私は二神島を訪ねるのは初めてであり、離島の調査も初めてである。これまでは居住地の関係もあり、関東近県、東北地方の農村が、調査対象地であった。そのため「関西の調査をしてみたい」、「離島・漁村調査も面白そうだ」、「松山の道後温泉でも入ってくるか」、ぐらゐの気分であった。また、私の生まれは、戦争直後、疎開先の岡山県笠岡市の沖合、瀬戸内海に浮かぶ神ノ島であった。二神島調査は、私の生まれ「故郷」の近くを知るという気分もあった。しかし、そのような物見遊山気分も、2009 年から 10 年にかけて 3 回の調査に同行するなかで、次第に吹き飛んでいった。ここでは、その調査過程を述べてみたい。

調査の前に、網野善彦『古文書返却の旅』（中公新書、1999 年）を読んでみた。第 4 章「海の領主―二神家と二神島」が今回の調査地を論じている。忽那諸島の二神島は、中世の「海の領主」として、河野水軍、村上水軍が暴れ回り、忽那氏が支配する拠点であり、近世まで九州と近畿を結ぶ瀬戸内海における海上交易の要衝であった。

網野が二神家の文書を借りたのが、1954 年であり、高度成長が始まる時であった。その 10 年後の 1965 年にも二神島を訪ねているので、1995 年の古文書返却は 30 年ぶりの二神島の旅であった。

「島の状況は 30 年前とは大きく変わっていた」「二神家の前の白砂青松の浜辺はまったく姿を消し」とある。たしかに、高度成長からバブル崩壊に至る 30 年の変化は著しいものであったろう。

さて私は、瀬戸内海共同調査に加わったのはいいのだが、何を調査していいか皆目検討がつかなかった。最初の調査であった 2009 年 9 月に、中村政則氏と二神島の村上水軍の末裔という村上宗一郎氏を訪ねて、島の近現代の歴史を聞き取りした。そこでわかったことは、近年まで島ではミカンの隆盛の時代が続いたということであった。

私は 1980 年代から、神奈川県小田原市の自治体史編纂にかかわっており、近現代の小田原のミカンの発展には関心をもってきた。小田原市では、戦後初の公選市長は魚問屋の一族であり、それが高度成長を経てミカンの隆盛とともに漁業の力が落ちると、市長はミカン農民に変わるのである。サカナからミカンへの変化を象徴する戦後史である。だが、網野氏の「旅」を見ても、村上氏が話すような二神島の近現代のミカンの話がまったく出てこない。中近世の海に関心があつて、現代の山のミカンには関心がなかったのだろうか。

愛媛県はミカンの主産地であることは誰でも知っている。「愛は静かに」という言葉がある。「愛」は愛媛県、「は」は和歌山県、「静かに」は静岡県である。ミカンの三大産地であり、愛媛県は 1970 年から 34 年間全国一の出荷量を誇っていた。ついでに言えば、4 位は伊豆から小田原にかけての神奈川ミカンである。「愛は静かに神だのみ」というのであろうか。ミカンの産地は、江戸時代の和歌山から海辺の村の日当たり良い傾斜地に広がっていったのである。ミカンと海は切っても切れない関係にある。

そこで、私はこの共同調査で、愛媛県忽那諸島のミカンを調べてみようと思い立った。

2010 年 9 月 6～8 日の第 3 回調査で、二神島の隣、忽那諸島の中心である中島を訪ねた。中島は忽那諸島の中心に位置する島で、諸島のなかの最大の島、まさに真ん中の島ということである。この島が忽那諸島のミカンの発祥の地であり、中心地であった。「中島ミカン」発



写真 1 島田茂一郎碑

祥の地というのは、現在の JA えひめ中央農協中島支所の前にある島田茂一郎の碑に記録されている。明治 40 年ごろ、ミカンの「木出し時に誤って折損し切除した枝の観察からミカンの整枝剪定を生産技術として確立」したという。これによって、島田茂一郎は「ミカンの神様」といわれ、ここから中島ミカンの発展が始った。日露戦争後から温州ミカンとして、中島から忽那諸島に広がり、島ミカンが普及していくのである。中島ミカンが隆盛を極めるのは、戦後の高度成長による大衆消費社会の成立による。

網野が 2 回目に訪ねた 1965 年は、忽那諸島の各島の農協が合併して、中島農協が成立した時であり、ミカン作が絶頂期をむかえていた。この年中島、睦月島、野忽那島、怒和島、津和地島、二神島が一つの農協になり、ミカンの中島ブランドが成立したのである。二神島は 1948 年にミカンの出荷組合が出来て、1962 年には他の島に先駆けて中島農協に合併している。二神島と中島はとなり島であった。中島農協は 1968 年には中島青果農協と改組されて青果連に加入し、忽那諸島にミカン中心の産業構造が確立したのである。

そこで、私は、中島中央公民館の豊田渉氏の紹介で、中島で一番のミカン農家であった山本一郎氏を訪ねた。共同調査地の二神島からフェリーで中島に渡り、公民館と大浦にある山本氏の自宅で 1 日かけて話を聞いた。

山本氏は 1931 年 4 月生れの 79 歳である。話は大変面白かった。山本氏は、島一番のミカン農家になるが、もともとは農家の跡継ぎではなかったという。入り婿で山本家に入ったのである。父親は、中島小浜出身で、東京に出て無声映画の活動弁士をしていたという。徳川夢声と同期であったという。母は同じ中島出身であったが、一郎氏が生れた早々に、昭和の不況のため生活破綻で離婚し、一郎氏は中島に母親と一緒に戻ってきたという。ちょうど無声映画からトーキーに変わるころでもあった。



写真 2 山本一郎氏

弁士は失業したのだろう。島に戻った一郎氏は、敗戦時に中島の国民高等学校高等科 2 年の 14 歳であった。敗戦の 4 月 8 日に中島と二神島の水道を航行する戦艦大和を見たという。戦艦大和は、広島の実験港を出航して、片道特攻として沖縄戦に向かうところであった。忽那諸島と広島は近い。二神島の聞き取りでは、8 月 6 日の広島の実験港を島から目撃したという話があったが、忽那諸島の人びとは、多くは松山に出稼ぎするより、広島に出たという。

一郎氏は戦後小学校高等科から新制中学に編入して 1946 年 3 月に卒業し、大工見習いとして広島県呉市の大内組に就職する。すぐさま原爆投下跡の広島に入る。都市壊滅から復興の広島は建築ブームであり、一郎氏は大工として、腕を磨き、4 年目 19 歳で独立して棟梁となり、22 歳で 3 人の弟子（徒弟）を抱えるまでの、腕のいい大工になった。しかし、24 歳のときに、中島の山本家の婿養子となって島に戻る決心をしたという。山本家は田畑 7 反、山 4 町の上層の農家であったが跡継ぎの男の子がいないので、養子を迎えたのである。こうして、腕のいい大工棟梁は農家の主となった。跡を継いだのが 1953 年ごろであり、ちょうどミカンが隆盛に向かうときであった。網野善彦が最初に二神家を訪ねたのはこのころである。山本は、婿入りするやいなや積極果敢な経営を展開する。山を開墾してミカン畑にして、大成功をおさめるのである。1970 年には田畑もすべてミカン畑にして 3 町 3 反経営の大経営、農家の手伝い 8、9 人を雇い、ミカン収穫 1 万 2000 キロ、収入 1350 万円の中島第 1 位のミカン農家になったという。山本家の新築の家もこのころに建っている。この時代、島では代々の自給用の田をすべてミカン畑に変えた。中島の田はすべて無くなったという。わずかな自給を除き畑もほとんどミカンに代わり、農業は自給経済から、ミカン収入による貨幣経済に完全に切り替わったのである。

2010年9月12日から29日まで、サンパウロ大学日本文化研究所より招聘研究者をお迎えしました。

若手研究員招聘事業の訪問研究 —訪日の成果

菊池 渡（サンパウロ大学 助教授）



非文字資料研究センター若手研究員招聘事業の訪問研究員として9月12日から29日の18日間、神奈川大学に滞在した。到着した日は曇りであったが、翌日から30℃近い残暑となり、それが雨と変わり、帰国際には15℃に下がるなど、変則的な気温の変化、天候不順が世界的な現象であることをまざまざと見せつけられた感じであった。

改めて述べるまでもないが、非文字資料研究センターは世界の諸大学機関と若手研究者育成を目的とした学術協定を結んでおり、私が所属するサンパウロ大学日本文化研究所とは2年前に協定が結ばれたが、私はサンパウロ大学で、初めての訪問研究員となった。何事にも「初めて」にはそれ相応の責任とプレッシャーがつきものである。

訪日の目的は現代日本社会の階層、上下関係に関する文献の調査とフィールドワークの可能性を追求することであった。13日に行われたガイダンスを終えたあと、さっそく神奈川大学の図書館に通う日課が始まった。折りしも休講シーズンで、利用者も少なく、コピー機もほとんど独占状態で文献調査もはかどり、当初リストアップしてきた約40冊に加えて20冊、論文も10本ほど追加することができた。神奈川大学の図書館の蔵書は充実しており、ほとんどの書物を閲覧することができたが、その他を事務局の的確な取り計らいで日本常民文化研究所、そして東京大学の各図書館を訪問し、補足することができた。

結果として、当初の目的であった文献の他にもいわゆる「ウチソト」や「公私」に関する示唆的な書籍にあたることができたことも特筆したい。「ウチソト」と上下関係の関連は未だに理論的に統合されていない感がある。「ウチソト」は社会的アイデンティティ理論では内集団、外集団と呼ばれ、日本社会特有のものではないが、あえて日本社会における特殊性を挙げるならば、それは独自性という意味ではなく、他の社会よりも顕著な形で現れる帰属集団内、集団外における態度、姿勢の乖離ということになり、これは長い歴史の間に培われてきたもので

ある。「公私」の問題も天皇制と関連している以上、複雑であるが、特に戦前、戦後の日本社会における上下関係を語る上で避けて通れないテーマである。遑れば律令制に至る「公私」も現代社会では企業—従業員、上司—部下の関係に収斂されるという解釈もあるが、いかなものだろうか。

また、今回の訪日ではフィールドワークの可能性についても、関連文献を購入することができ、特に最終日の発表とその後の先生方とのディスカッション、コメントから有益なヒントと調査の糸口をつかむことができた。結果として、あらゆる意味で、今回の訪日で当初の期待以上の成果をあげることができたのは言うまでもない。

以上のように学術的な成果はもとより、今回は6年ぶりの訪日であったこともあって、旧交を温めたり、新たな出会いもあり、特に「居酒屋会合」のほうは、日本到着の翌日に偶然にも上京していた大学教授である知人と会ったのを皮切りに、毎日のように続き、最後はセンターが開いてくださった帰国前日の送別会であった。翌日の帰国の便が午前10時45分と早いのと時差調整の意味も含めて、その夜は寝ないで荷造りをし、4時40分に宿舍をあとにした。いずれにしても日本の「飲み会文化」を再確認し、体当たりの文化体験ができたことも望外の成果としたい。

久々の日本にはいろいろな変化が見られたが、6年に比べて、人々の表情が明るくなっているようにも感じられた。「停滞の20年」などと言われているが、当然ブラジルなどと比較すると、生活水準は断然高く、市民も新たな時代に順応してきたということだろうか。もっとも、東京の友人いわく「そんなに毎日楽しんでいたら、みんな明るく見えるよ」では身もふたもないのであるが。

最後にこのような貴重な訪日の機会を与えてくださった非文字資料研究センター、指導してくださった橘川教授をはじめとする先生方、また事務局、日本常民文化研究所や図書館関係者の皆様方に厚くお礼を申し上げ、ペンを置くことにしたい。

1970年は、高度成長の真っ只中、愛媛ミカン・中島ブランドの絶頂期であった。1970年代は温州ミカンに代わり伊予柑が爆発的にヒットした時代であった。1972年には、小柳ルミ子の「瀬戸の花嫁」が大ヒットしている。この時代、瀬戸内海は輝いており、「愛を信じて島から島へとお嫁に行く」娘たちがいた。嫁ぎ先は「段々畑にさよなら」してミカン農園をもった農家であったのだろうか。陽光に輝く瀬戸内の海は、バラ色の夢が実現する海でもあった。

山本一郎氏のオーラルヒストリーは、昭和不況から戦後高度成長に至るサクセス・ストーリーでもある。

さらに、一郎氏の話が終わったとき、2010年3月の第2回調査のときに聞き取りした武田満幸氏が加わった。武田氏は近所に住んでおり、わざわざ挨拶に来てくれたのである。武田氏は1930年生まれで80歳である。彼は中島青果農協から愛媛県青果連の専務理事となり愛媛ミカンの中心人物となった実力者である。中島町の町長もつとめている。中島から愛媛青果連の専務を出したことは、中島ミカンがまさに愛媛ミカンの中核に座ったことを意味していた。彼によって中島ブランドが確立したのである。

しかし、ここから一郎氏の息子、良幸氏が話を引き継ぐ。世代は変わる。彼は50代の壮年期で、いま山本家の当主である。良幸氏は語る。1968年のミカン不作を頂点として、ミカンは早くも下り坂となる。70年代は伊予柑が当たり、ミカンの隆盛は続くが、1980年代のオレンジ自由化、さらにバナナ、リンゴ、ナシなど多様な果物が広がり、ミカンの消費が半分に落ち込むなかで、ミカンは果物の王座を失っていく。ミカンの衰退とともに、ポンジュースなど加工品にも進出した。さらに、現在ではミカンにポンカンなどいろいろな柑橘類の交配をかけて、デコポン、清見、はるみ、不知火など多様な品種を生み出している。しかし、新品種は必ずしも土壌と合わず、ミカンの衰退を止めることはできないという。

ついに1997年、中島青果農協は、温泉郡の全農協と合併し、えひめ中央農協に吸収され、2002年には、ついにミカン箱から中島ブランドが消えた。1965年中島ブランドが成立してから40年足らずで中島ミカンは終焉を迎えたのである。戦後史の一サイクルが終わったのである。

現在、山本家では3町5反のミカン経営で年収250万円という。これではとても経費もつぐなえないので、今年はついに1町歩のミカン畑を廃園にしたという。3

町5反で島一、二をあらそうミカン農家が、年収250万円とはあまりの衰退に声もなかった。これでは都市の失業者、ワーキングプアの所得水準と同じである。良幸氏の怒りは心頭に発する。ミカン経営が成り立たない現状と農政への怒りである。また中島ブランド復興にける思いも強い。いまミカン経営農家は崩壊の危機にある。

私は話を聞いたあとに、山本ミカン園をクルマで案内してもらった。廃園がところどころに広がり、今は使われない山の傾斜地に敷かれたモノラックが錆びたまま放置されていた。ミカン作の崩壊を肌と感じた。

以上、二神島調査から、中島ミカンの聞き取りを通して、私の瀬戸内海共同調査の方向性が固まった。近現代の島々に広がったミカン作の盛衰を通して、島の人びとの暮らしの変貌を明らかにすることである。そのためには、①ミカンは忽那諸島、中島に入る前どこから来たのか。ミカンのルーツを知ること。②ミカンと海の関係、ミカンは海を通して関西市場とつながっている。ミカン船はどこへ行くのか。③ミカンは人びとの暮らしをどう変えたのか。忽那諸島の生業は島によって異なる。漁業、畑（タマネギ、生姜）、田の構造がミカンによってどう変化したのか。ミカンは島の工業、商業をどう変えたのか。ミカンの民俗（正月ミカンなど）は他の研究者から教えてもらうことにして、しばらく瀬戸内海のミカンの現代史にこだわってみたい。

私はこれらの島の人びとのオーラルヒストリーを通して、歴史は単なる過去を訪ねて、栄華の跡を懐かしむだけでなく、現状との厳しい緊張関係のなかで、現代ときり結ぶような研究ができなければならない、と痛感した。歴史は過去を美化することでない。歴史ロマン主義ではいけないのだ。地方産業の危機と地域崩壊の現場に立って、過去の歴史を訪ね人びとの話を聞くことが、それらの人びとに勇気をあたえるような研究に結びつくことを、心に刻みたい。



写真3 ミカン園から中島大浦をのぞむ

コラム 海外提携機関紹介 Column

東アジア文明研究センター（フランス）

シャルロット・フォン・ヴェアシュア
（フランス国立高等研究院 教授）

概要

東アジア文明研究センター（CRCAO, Centre de recherches sur les civilisations de l'Asie orientale）は、フランス国立科学研究所（CNRS）のなかの、中国、日本、チベット研究の3つの研究部を併合して、2006年に設立されました。CRCAOは、これらの3つの文化圏が主要な研究対象ですが、より広い範囲での研究活動にも開かれており、東アジア諸国に共通する文化遺産を軸とした広範囲の研究事業を進めています。

CRCAOの研究活動は、学際的な多様な学問分野における古代から現代までの各時代を網羅しています。それらの卓越した研究領域は宗教、歴史、芸術、文学、そして文学や古典の伝承を含んでいます。特に古代資料（敦煌文書等を含む文書や、図像、考古資料）の専門的解説知識を通じて国際的に評価されています。

研究員

東アジア文明研究センター（CRCAO）は、約50名の常任研究員（内、中国専門研究者22名、日本専門研究者22名、そしてチベット専門研究者6名）と約40名の外部研究員で構成されています。加えて、60名余りの博士課程学生、ポストドクター、そしてアジア、ヨーロッパ、アメリカの研究機関からの研究者もまた本研究センターに協力し研究に関わっています。

CRCAOの常任研究員は、フランス国立科学研究所（CNRS）、フランス国立高等研究院（EPHE）、パリ・ディデロ（パリ第7）大学の三機関に属する教官と研究技師で構成されています。セミナー、シンポジウム、ワークショップ等の事業や共同研究プロジェクトと協同出版プロジェクトにおいて互いに能力や技術を提供しあいながら共同研究を進めています。

現在、所長はアニック・ホリウチ、副所長はエリック・トロンベールが務めています。

研究機関

東アジア文明研究センター（CRCAO）の研究活動は

フランス国立科学研究所（CNRS）、フランス国立高等研究院（EPHE）、パリ・ディデロ（パリ第7）大学、コレージュ・ド・フランスという四つのフランスの代表的な人文科学研究機関によって支えられています。

CRCAOは、コレージュ・ド・フランス（パリ第五地区）の別館内に設置されており、CRCAOが購入したすべての資料は、コレージュ・ド・フランス東アジア研究所の各専門図書館に保管されています。

事業内容

CRCAOは、国際的に組織された独自の十余りの研究プログラムを実施しています。例として中国宗教建築におけるインド・チベットの影響の研究、ベルナール・フランク・コレクションにおける御札（日本各地の寺社のお守り札）の研究、仏・英・中・日 農業技術用語集の編纂などがあげられます。

CRCAOはまた、翻訳および翻訳技術の進展に努めています。多数の出版社の支援を受けながら、中国の古典や日本の文学と歴史史料の翻訳事業を進めております。また、オンラインでの多言語出版物 Revue d'études tibétaines (RET) の編集や Revue d'Etudes mongoles et sibériennes, centrasiatiques et tibétaines (EMSCAT) の刊行に協力しています。



CRCAOの共同研究の成果。日本の研究者も協力して編纂された『京都歴史地図』（B5版528頁、2008）



CRCAOの研究室

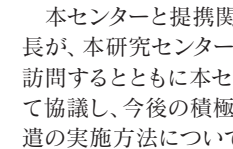
本センターへの来訪者

サンパウロ大学（ブラジル） 森幸一教授【来訪日：2010年7月7日（水）～8月5日（木）】



本センターと提携関係にあるサンパウロ大学日本文化研究所から森幸一所长が来訪され、約1ヶ月間本研究センターを拠点に調査研究を行いました。7月9日（金）には本センター長・運営委員と今後の学術交流について意見を交わした後、サンパウロ大学と本学の国際交流協定締結の可能性について神奈川大学中島学長と協議しました。また7月26日（月）には、日本常民文化研究所主催の第84回研究会で「ブラジルにおける日本移民研究の回顧と展望」と題して講演をされました。

北京師範大学（中国） 万建中教授【来訪日：2010年7月13日（火）～7月19日（月）】



本センターと提携関係にある北京師範大学民俗学と文化人類学研究所の万建中所長が、本研究センターの招聘で来学されました。7月16日（金）には、中島学長を表敬訪問するとともに本センター長・運営委員と、本センターとの学術交流のあり方について協議し、今後の積極的な取り組みを相互に確認しました。特に若手研究者の短期派遣の実施方法について具体的な方策を検討しました。来訪中、福田センター長の案内で、江戸東京博物館その他東京の文化施設、また横須賀市佐島の夏祭りの調査をされました。

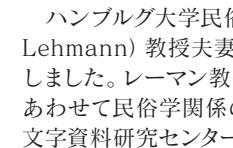


ハイデルベルグ大学（ドイツ） ハラルド・フース教授【来訪日：2010年9月28日（火）】



本センターと提携関係にあるハイデルベルグ大学・クラスター「グローバルな文脈におけるアジアとヨーロッパ」から、ハラルド・フース（Harald Fuess）教授が来訪され、本センター長・運営委員と、本センターとの学術交流の今後の進め方について協議しました。

ハンブルグ大学（ドイツ） アルブレヒト・レーマン教授【来訪日：2010年9月22日（水）】



ハンブルグ大学民俗学・文化人類学研究所のアルブレヒト・レーマン（Albrecht Lehmann）教授夫妻が来学され、本センターを訪れ、センター長・運営委員と懇談しました。レーマン教授は日本民俗学会の招聘で来日され、東京その他で講演をし、あわせて民俗学関係の研究機関訪問を希望され、本学の日本常民文化研究所、非文字資料研究センターを訪問されたものです。



中国浙江大学（中国） 阮雲星准教授【来訪日：2010年11月22日（月）】



大阪府吹田市にある国立民族学博物館の外国人研究員でもあり、中国浙江大学公共管理学院の准教授でもある阮雲星博士が、日本常民文化研究所を会場として開催された第106回比較民俗研究会にご出席され、それに先立ち本センターをご訪問されました。

福田アジオ教授 最終講義のご案内

非文字資料研究センターのセンター長・福田アジオ教授が2010年3月31日で退任します。これにともない最終講義が下記の日程でおこなわれます。

日 時： 2011年1月29日（土） 15:00～17:00
会 場： 神奈川大学横浜キャンパス16号館セレストホール
講義テーマ： 「小さな石仏にも歴史あり」

主な研究活動

運営委員会

- 第4回 7月14日 2010年度海外提携機関からの訪問研究員について、2010年度海外提携機関への派遣（再公募）について、2009年度奨励研究者の成果論文の査読について
- 第5回 9月22日 中国・韓国の旧日本租界班「公開研究会」および「出版企画」について、ニューズレターNo.25および年報7号の編集計画について、第二期研究計画について
- 第6回 10月15日 2010年度海外提携機関への派遣研究員（再公募結果）について、2010年度海外提携機関からの訪問研究員について、2009年度奨励研究者の成果論文の査読結果について、第一期研究成果のまとめについて、年報7号の編集計画について
- 第7回 11月10日 外国人研究員の研究期間の変更について、第二期事業計画について、2011年度センター予算（案）について
- 第8回 11月24日 訪問研究員（北京師範大学）への対応について、年報7号の編集計画について、第二期共同研究体制の編成について、次期センター長の選出について

研究員会議

- 第3回 7月29日 2011年度文部科学省補助金「(1)私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」（仮）構想調査の作成・提出について、センター第二期事業計画の策定について
- 第4回 10月13日 センター第二期事業計画について、2011年度センター予算（案）について
- 第5回 11月17日 センター第二期事業計画について、2011年度センター予算（案）について、次期センター長の選出について

研究会

研究班

- 「非文字資料研究ネットワーク形成研究」研究会 11月16日、24日
- 「非文字資料発信システム研究『地域統合情報発信の開発』」研究会 7月16日
- 「『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂共同研究」研究会 7月14日、27日、8月18日、9月1日、8日、29日、10月6日、20日、11月10日
- 「関東大震災の都市復興過程とそのデータベース化」研究会 7月12日、13日、8月24日、9月1日、21日、22日、10月4日、18日、19日、21日、30日、31日、11月1日、2日、20日、29日
- 「中国・韓国の旧日本租界」研究会 9月3日

現地調査

調査テーマ	日程	場所	調査メンバー
非文字資料発信システム研究 『地域統合情報発信の開発』	10月3日～5日	只見町	佐野賢治
持続と変容の実態の研究 —対馬60年を事例として	9月16日～20日	対馬	橘川俊忠、津田良樹、 本田佳奈

表紙紹介

2010年10月31日におこなわれた「関東大震災の布絵づくり」ワークショップで作成された2つの布絵です。公開研究会および公開展示で、絵巻や震災漫画、子どもの絵を通じて感じたものを布絵で表現しました。創作過程は体を使って表現したり、クレヨンを使ってイメージを膨らませたりと非常にユニークなものでした。詳細は本誌に掲載されています。

編集後記

当センターが発足して3年、第一期の共同研究のまとめをする時期になってきました。本号に掲載した公開研究会・シンポジウムの報告は、そのまとめを意識したものです。より本格的なまとめは、年報に掲載することになります。来年度は、センター長も編集担当も替わり、新しい体制で第二期の研究活動が開始されます。一層の充実を期待します。（橘川）

非文字資料研究 No.25

発行日 2011年1月10日発行

編集・発行 神奈川県立 非文字資料研究センター
日本常民文化研究所

Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

■Tel.045-481-5661 ■Fax.045-491-0659 ■URL <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

